

41642

教科書文庫

7
810
41-1930
20000 71509

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

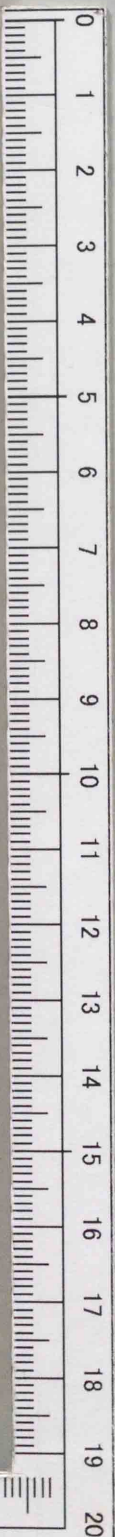
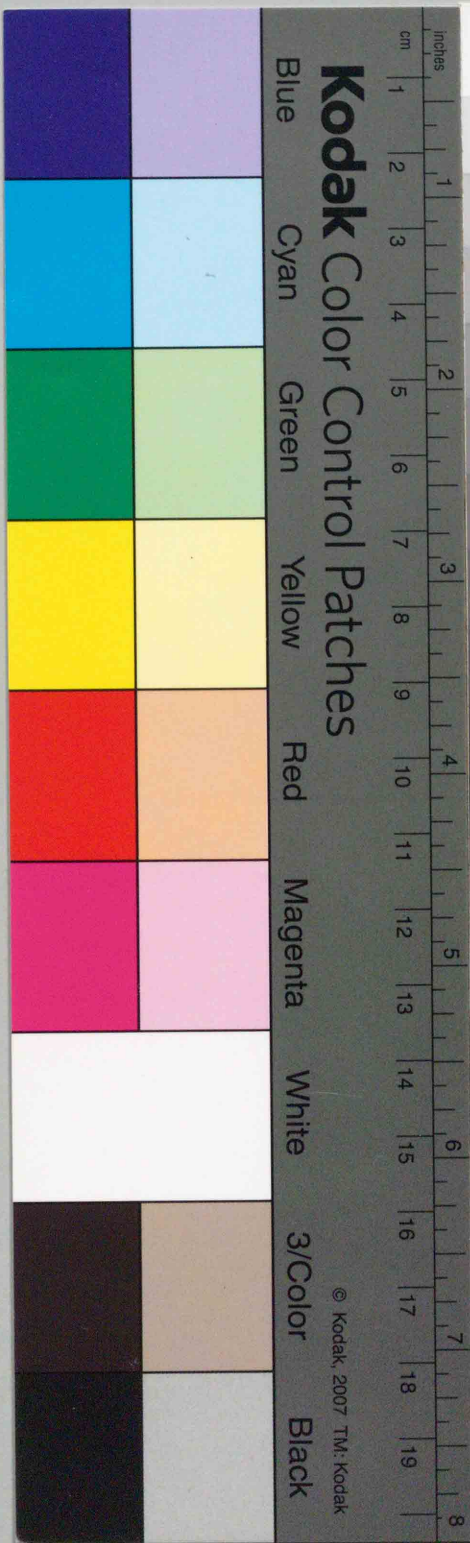


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak

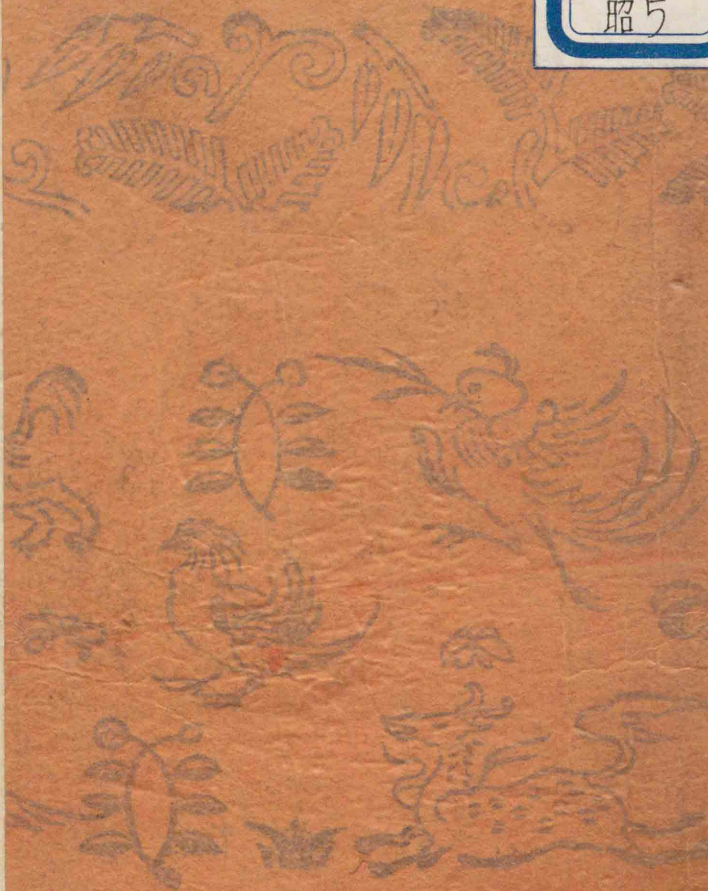


4a
810
昭5

中等國語讀本

新修二版

卷一



資料室

濟定檢省部文

日五月七年八和昭  
用科語國校學業實

日九月十年五和昭  
用科語國校學中

# 中等國語讀本

新修二版



編者

金落  
子合  
元直  
臣文

42  
810  
BB5

岡野睦夫



富士影 七一

影 富士 (生寫真) 吉清傳 (元)

卷一 目次

一	人生の曙	.....	一
二	輝く雲(新體詩)	.....	五
三	さくらの花	.....	七
四	春二篇	.....	二
	一、春暖かし	.....	二
	二、柔かき波	.....	三
五	學友におくる	.....	四
六	國引	.....	九
七	伊勢參宮	.....	三
八	皇太子當時の今上陛下	.....	七

九 舊い日記	沼波瓊音	三六
一〇 湖山長者	五十嵐 力	四三
一一 日本一の百姓	新井友吉	四九
一二 スパルタ武士	(國定讀本)	六〇
一三 海舟の苦學	(海舟言行録)	六六
一四 夏二篇		六九
一、庭	高濱虚子	六九
二、畑	若山牧水	七三
一五 笑話三則		七五
一、梨泥棒	和田垣謙三	七五
二、老病で	同	七六
三、詩人を逐ひ出せ	市島謙吉	七七

一六 最後の授業	菊池幽芳	七九
一七 富士山	金子元臣	八八
一八 山の歡喜(新體詩)	河井醉茗	九八
一九 驟雨浴	徳富蘆花	一〇一
二〇 狂夫の言		一〇九
一、かんにん	柳澤淇園	一〇九
二、愚公の山	室 鳩 巢	一一〇
二一 消息三篇		一一三
一、朝鮮飴	尾崎紅葉	一一三
二、小生の銷夏法	饗庭篁村	一一三
三、秋 涼	島崎藤村	一一五
二二 天の河	山本一清	一二六

二三	雀	北原白秋	二三	
二四	犬ころ	二葉亭四迷	二八	
二五	明治天皇の御遺物を拜す	その一	笠井信一	三七
二六	同	その二	同	四二
二七	箱根神社祈願の記	大町桂月	五三	
二八	角笛の響	その一	吉江孤雁	五九
二九	同	その二	同	六五

(附録) 國語假名遣一覽

(終)

## 中等國語讀本 新修二版 卷一

### 一 人生の曙

實一実

こゑ。(聲)

學一学

曙はまさに一日のはじまりである。實に爽快である。殊に多望である。その多望なのは、すぐ續いて朝がくるからである。やがて晝がくるからである。威勢のいい喜びの聲は、太陽の光と共に、段段強まり高まつて往く。

悲しみもよろこびもよく知らない幼年時代は、眞暗な夜のやうなものである。それがいよいよ小學校を卒業した少

ちやうど

見え。

まづ。

みる

覺—覚

い。ふ

かうして

年時代となると、全く曙である。ちやうど山の端から射す曙の光に、世間の物象がはつきりするやうに、少年はこれまで氣が付かなかつた世の中が見えてくる。

そこで、まづどうしてこの世に立つて往かうかと考へる。何になり、何をしたらよいか、自分の性質は、果してどんな仕事に適してゐるかなど考へる。また世の中の事に對して、善いか悪いかの分別もついてくる。ここに自己の修養の必要を感じ、志を立てなければならぬことを覺り、また自己の任務を知り、さてはこの社會國家を改善して往かうなどいふ大きな望も起す。

かうして、少年の心は人生の曙に目覺める。

悔ゆる  
徳川頼宣  
家康の第十子。  
紀州藩祖。官權  
大納言に至り、  
寛文十一年正月  
薨す。(一七六二  
年—一七三三—  
年)

頼山陽  
名は襄、通稱久  
太郎、安藝の人。  
漢學者。最も史  
筆に長ず。天保  
三年九月歿す。  
(一七四〇年—

「若い時は二度はない。全く二度はないから、若い時に勉めなければ、年寄つてから必ず悔ゆる時が来る。むかし徳川頼宣が、大阪の役の初陣に戦功のないのを歎いた時、或人が「御



年少の御身、今後幾度  
東もよい機會がござい  
天ませう」と慰めると、頼  
紅宣は怒つて、「我が十四  
歳の時は再び来るか」

といつた。また頼山陽は、十二歳で立志論を作つて、「男兒學ばざれば則ち已む、學ばば則ちまさしに群を超ゆべし」といつた。これ等は、人生の曙に目覺めた實例であらう。

二四九二年

歡一欲

曙が爽快であるやうに、少年の心は爽快である。曙が多望であるやうに、少年は多望である。朝と晝とが曙についてくるやうに、最も威勢のいい青年時代、すべてが成熟する壯年時代が手をひろげて待つてゐる。何と少年の境涯は歡ばしい勇ましいことではないか。

一日の計は朝にあり。(月令廣義)

朝の一時は晩の二時に當る。(俚諺)

生涯の朝には働け。(ギリシヤ古諺)

早朝一時間を損すれば終日これを追はねばならぬ。(イギリス俚諺)

朝の時は黄金を含む。(ドイツ俚諺)

若い時の苦勞は買うてせよ。(俚諺)

### 二 輝く雲 (白鳥省吾)

白鳥省吾  
宮城縣の人。明治二十三年二月生まる。

やはらかう

おもひ出の胸にわくごと、  
水色の晴れたる空に、

やはらかう雲ひとつゆく。

飽かず見る空のけしきに、

ほのかなる晝の月、

心ありげに光なく、

さも消えぬべく残りたり。



輝けるその雲ひとつ、

遙なる地を見つつゆく。(愛慕)

雲は我我の日常經驗する自然現象中で、最も變化に富む、最も美しいものであらう。故に古人は雲に關する觀察を遠い昔から行つてゐる。印度では紀元前四世紀の頃既に晴雲六十種、雨雲八十種に分類されてゐたといひ、我が國でも豊旗雲などいふ美名が既に萬葉集に見える。然し自然科學に立脚して雲を分類したのは、千八百一年佛國のラマルクが最初である。但、現在採用されてゐる分類法の基礎となつたのは、千八百三年英國のホワードのなしたもので、亂雲、雨雲、層雲、擴がれる薄い雲層、積雲、むくむくと堆積せる雲、卷雲、高い處にある羽毛狀の雲の四つの基本形になつて居り、更にこれが小さく種種に分類されるのである。

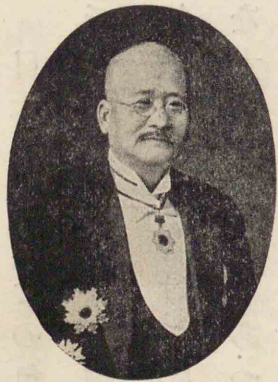
當一当

Cherry チェリー  
亂一乱

まがひ  
國一国

### 三 さくらの花

わが日本の國花として、世界に誇るに足るものは櫻であらう。今支那でいふ櫻桃が、櫻に相當するといふことである



一 矢 賀 芳

が、日本の花の美しさには及ばないとのこと。西洋のチェリーも、實は大さいが、花の色は薄い。爛漫と咲き亂れた櫻花の、山を埋め谷に満ち、雲と

まがひ雪とまがひ景色は、日本特有の美景である。支那の國花は牡丹である。その濃艶な粧は、美しいには相違ないが、あつさりとした日本趣味ではない。香氣鼻を衝く

稱一称

著一着

空に知られぬ雪  
拾遺集、紀貫之  
「櫻ちる木の下  
風は寒からで空

薔薇の花も、棄て難く美しいものであるが、これも艶冶の態があつて、清楚人を動かす野趣に乏しい。しかし、薔薇は歐米人の花の王と稱するものである。  
日本の櫻は、その色は極めてあつさりとして居る。但純白ではない。いはゆる櫻色である。その瓣は極めて薄い。一樹に無数の花を著けて、咲く時は一時に爛漫と残なく咲く。上品な大宮人の風もあつて、楚楚とした野情も添はつて居る。空をあをく水清い日本の景色には最もよく釣り合つて、深山、都市、どこにあつても皆宜しい。廿日草の長い盛もなく、薔薇花の高い香氣も無いが、とにかく見事である。その散つて、空に知られぬ雪」と降つては、一段の風趣があつて、殆ど言語に絶

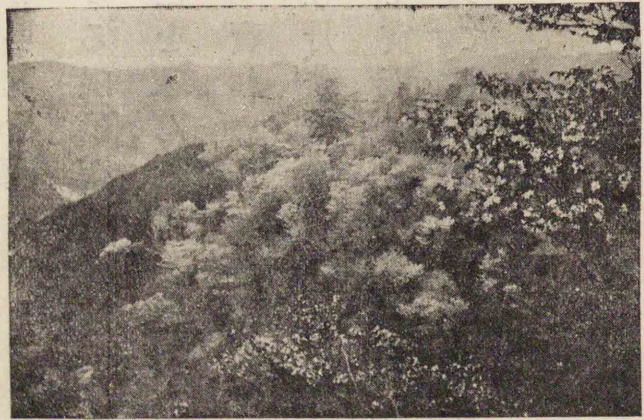
に知られぬ雪ぞ  
降りける」。

花ぐはし櫻  
日本書紀に見  
ゆ。允恭天皇の  
御製。

照りもせず云云  
新古今集、大江  
千里「照りもせ  
ず曇りもはてぬ  
春の夜の朧月夜  
にしくものぞな  
き」。

してゐる。日本の花の中の花は櫻である。古く「花ぐはし櫻」と歌はれたのは、蓋しこれが爲である。

櫻の咲くのは春の末である。春の日本は水蒸氣が多い。晝はどんよりと曇つて、寒くもなく暑くもない。花曇、夜は、照りもせず曇りもはてぬ朧月夜、雲霞とまがふ花には、最もふさはしい景色である。春の特色は、どこまでも駘蕩といふ點にあり、溫和な所にあり、峻嚴猛烈といふ心の微塵もない



山 野 吉

きは立つ

吉野山の歌  
八田知紀の作。

花の雲の句  
松尾芭蕉の作。

鐘一つ云云  
榎本其角「鐘一つ賣れぬ日はなし江戸の春」

芳賀矢一  
文學博士。福井縣の人。東京帝國大學名譽教授。國學院大學學長。昭和二年二月歿す。(二五七年—二五八年)

所にある。櫻はこの時候に孕まれて咲き出る花である。きは立つた特色の無い所が即ちその特色である。

「吉野山霞の奥は知らねども、見ゆる限は櫻なりけり。」これは満山花に包まれた吉野山の景色を詠んだのである。花の雲鐘は上野か淺草か。これは「鐘一つ賣れぬ日もなき」大都會の花に掩はれた光景である。櫻は牡丹、薔薇のやうに花瓣を賞翫する花では無くして、樹として賞翫する花である。否多くの樹を集めて、人は唯花中にあつて賞翫する花である。上からのぞいて愛でる花では無くして、下から眺めて愛でる花である。春風四月、日本人はしばし花の世界の人となるのである。(芳賀矢一「月雪花」)

#### 四 春二一篇

一 春暖かし

桃は咲かねど、春雲日を籠めてあたたかに、梅花も白きはすでに盛過ぎんとし、椿は花、葉よりも多く、ぼてぼてとはや落ちそめぬ。綿弓鳴り、鶏鳴き、悠悠として春村に満つ。

田の水もやや温みて、雑草青み、七色の脂浮める土の水を吸ひ水を吐く音、びちびちと、土も復活の満足をつぶやくに似たり。

麥の緑ますます濃く、菜の花も咲きそめ、田の畔の野茨も簇簇と芽を吐きぬ。

箱根

神奈川縣足柄下郡にある山。  
足柄 神奈川縣足柄上郡にある山。

あを(青)

満満

富士  
静岡、神奈川、  
山梨三縣に跨る  
名山。高さ一二  
三七〇尺。

徳富蘆花  
名は健次郎。熊  
本縣の人。文學  
上の著述甚だ多  
し。昭和二年九  
月歿す。(二五二  
八年—二五八七  
年)

不動堂  
神奈川縣三浦郡  
逗子の海岸にあ  
り。

ざわめく

圓一円

昨日の暖雨に箱根、足柄雪融けて、富士も麓より四合目あ  
たりまで白衣を脱げり。(徳富蘆花「自然と人生」)

二、柔かき波

不動堂に腰かけて海を眺む。

春の海ゆらゆらとして漂ふ。あ  
る處は大いなる蝸牛の這ひたる  
痕のやうに滑に白く光り、ある處  
は億萬の鱗族ざわめくやうに青  
く顫へり。磯近き水は透明にして  
明礬色を帯び、圓き石箇箇、紫の影  
をもちて水中に横たはり、茶褐色



(動不子浪) 岸 海 子 逗

の藻は梳りたる髪の如く岩を纏ふ。波といふほどの波はな  
くて、ただ揺揺たる海のうねりは、衣の皺をのすやうに、一つ  
づつ、すうと押し寄せ來りて磯に碎け、岩の凹みに入りては  
だぶりと響き、小石に散りてはざあと囁く。

見突の舟あり、時時棹を舟の上におとす音、かたりと響き  
ぬ。章魚、蝦など突く男あり。ざぶざぶ淺瀬をわたりて足もと  
より粼粼たる銀を踏みいだす。(徳富蘆花「自然と人生」)

春日うららかにして、梅花一庭に薫す。小猫縁にうづくまり、少女二人、  
追ひ羽子をつく。風死して、空にうなりし紙鳶みな地に落ち、一鳶ひと  
り高く盤旋す。(大町桂月)

とほり

五 學友におくる

君、その後は御無沙汰してゐました。御承知のとほり、うちの都合でこんな片田舎に來ましたので、まるで島流しにでもなつたやうな氣がします。然し御安心下さい、毎日元氣よくこちらの中學に通學してゐますから。けれども、校門を潛つて、さて教室に著席して見ると、右も左も皆知らぬ顔ばかりで、永年馴染んだ君の姿の見えないのが、何としても物足らないのです。君と机を並べてゐたその頃が戀しくてたまりません。いつそ土曜、日曜をかけて、飛行機で訪問が出來たらと思ふことが、折

潛—潛

並—並

さう

折あります。

さうさう、去年のたしか新嘗祭の休日でしたなあ。君のうちで大勢で遊びに往つて、生栗を火鉢にくべたら、ほんと爆發して、一つ二つ火片が散亂したのを、皆が總立になつて拂つた時、君は何といひましたか、覚えてゐますか。君は「一軒焼だから安心しろ」と、泰然自若と構へてゐられたではありませんか。僕は實に驚きました、呆れました。そして竊につくづく感心しました。君は決して凡人ではないと。僕は級中のおつちよこちよいで、頗る氣が短い。君は級中での君子人で、頗る氣が長い。氣質の正反對なこの二

總—總

竊—窃

ませう

畫一画  
陰一蔭

人が誰よりもお互に一番氣が合つてゐたことは、君にも覺がありませう。不思議なものさね。全く僕の短處は君の薰化によつて、段段と直つてゆくやうに思はれて、いよいよ君のそばが離れ難いのでした。然し運命は君と僕との間に垣を作りました。かうして君と別れてゐる僕は、つまり氣短のおつちよこちよいで一生を終るのではないかしらと、氣が氣でないのです。只君に喜んで頂きたい事が一つあります。それは田舎に來たお蔭に、僕の中からだが近來めきめきと丈夫になつた事です。休日毎に、弟や妹と一緒に田野の間を驅けまはり、折折例の水彩畫をなすつてゐます。そのうちか

聳え

うるはし

麥一麦

さへづる(轉)

ら最近のもの一枚お目にかけます。一つ説明をつけませう。

小川の傍に高い松の聳えてゐる、その下の藁屋が僕等の住居です。土橋の上に立つてゐるのは弟と妹で、川の堤にぼちぼちと色うるはしいのは、實は色汚いのは、若草の中に、堇花、蒲公英、蓮華草などの咲き亂れたので、その中には土筆も多く、妹などは時時前垂に一杯にして歸ります。堤の向に緑の濃いのは麥畑、黄色なのは菜の花で、盛に蝶が春の舞を奏でて居ます。霞んだ空にあがる雲雀の影、山陰に轉りかはしてゐる鶯の聲は、さすがに名人の僕でも描けません。君よろしく想像して下さい

い。  
今回はこれで筆をおきます。どうか君の方の近況も知らせて頂きたいものです。待つてゐます。

世間には往往筆無精と自稱してゐる人があるが、特に筆無精といふもののあるべき筈はない。筆無精ならば多分他の事にも無精だらうと或人はいつたが、誠に一面の眞理である。事務の手紙は停滞なく機敏に書かねばならぬ事はいふまでもないが、社交の手紙とても、なるべく世間を廣くし、交際の親密を保つて行かうと思へば寒暄病災の見舞は勿論、平生別にこれといふ用事のない時でも、何かの機會に出来るだけまめに手紙を書くがよい。常は一年も二年も御無沙汰をしておいて、いざ用が出来るに長長と今昔の交誼を叙べるなどいふことは往往あるが、面白いことではない。その結果から見ても、なまけ書生の試験勉強と同様で、あまり好成绩は得られぬ。(杉谷代水)

### 六 國 引

伊弉諾尊、伊弉册尊がお生みになつた日本は、はじめの程は小さくて、足りない處が多かつたのを、子孫の神神が、だんだんに修理をお加へなされたので、今のやうな立派ないい國となつたのである。

中にも出雲の國は取り分け小さかつた。ごく幅が狭くて、帯のやうであつた。素盞鳴尊の四代目の孫の臣角命おみつのといふ御方が、いかにもこれでは狭過ぎる。ちと縫ひ足さなければいけない」と思し召し立たれた。そこで海岸の巖の上に立つて、何處にか國のあまりは無

ちひさい(小)  
加へ

いかと、遙に西の方を御覽になると、漫漫とした大海を隔てた彼方に新羅の國が見えた。

「おお、あるある。新羅の岬に國のあまりがある。あれを引き寄せてこの國に縫ひ合はせよう。」

と、臣角命は神の御力を現はして、幅廣のたひらな大鋤をとつて、その新羅の出鼻をずばりと切り分けて、さて三撚の大綱をうち掛けて、その國のきれに結び附け、えいやえいやと手ぐり、そろりそろりと引き寄せて、「國來い國來い。此處まで來い」と、とうとう出雲の海岸まで引き附けて縫ひ合はせられたのが、古津から杵築の岬の邊である。この國引の綱を繋ぎ止めた杵が即ち今の三瓶山といふ山、又その綱は今の菴

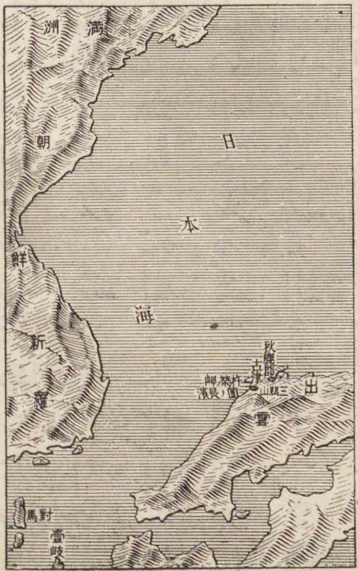
古津、杵築の岬、菴の長濱  
共に島根縣簸川郡、  
邊一辺  
三瓶山  
島根縣安藝郡。

合はせ

の長濱である。

まだこれでも出雲の國が小さいので、この度は、北の方に國のあまりは無いかと御覽になると、滿洲の方に大分廣い處が見えた。早速其處を切り分けて、又もや三撚の綱をうち掛けて、「國來い國來い。此處まで來い」と引き寄せて接ぎ合はせられたのが秋鹿郡あたりである。

「今すこし足さなくてはいはれて、東北の方を探して、その國のあまりを引き寄せて、またこれをも縫ひ附けられたので、とうとう今日の出雲



處一處

秋鹿郡  
今廢して八東郡  
に入る。

と。とうとう



しまふ。

澁川玄耳  
名は柳次郎。佐賀縣の人。新聞記者。大正十五年四月歿す。  
(二五三四年—二五八六年)

の國がすつかり出來上つたのである。  
臣角命はこの大仕事の終に、杖に縋つたまま、覺えず「おお」と息をつかれた。定めて大したお勞れの事であつたらう。神代から幾千年を経た明治四十三年になつて、あのちぎり殘の朝鮮の全部が、遂に悉く我が日本に引き附けられてしまふことになつたのも面白い事である。まだまだ世界には、わが日本が智仁勇三擧の綱うち掛けて引き寄すべき國が、いくらかもあるであらう。(澁川玄耳—日本古事記断による)

大日本は神國なり。天祖はじめて基をひらき、日神ながく統を傳へ給ふわが國のみこの事あり。異朝にはそのたぐひなし。この故に神國といふなり。(神皇正統記)

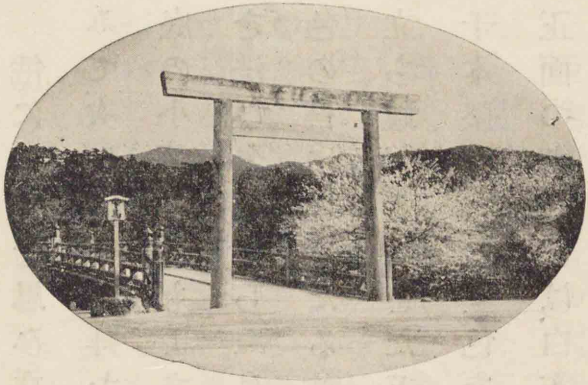
### 七 伊勢參宮

山田  
三重縣度會郡  
拜一拜

支ふる  
屏一屏  
かつをぎ  
(堅魚木)

俄に參宮を思ひ立ちて、只今山田に著きぬ。まづ外宮を拜みて、次に内宮を拜む。殊に、内宮の畏さは言語に絶えたり。水底の小魚の數もよまるる五十鈴川の清き流に口そそぎ、心を洗ひ、名も知らぬ鳥の、奥深く啼く音に耳を澄しつ、緑青色の苔にさびたる神杉の太き幹の、天を支ふる柱の如くに立ち竝べる間をたどりて、暫く往けば、木立の奥、屏の彼方に、千木、堅魚木の金色なせるが拜まる。進みて屏の内に入れば、正面の御門には、白布の垂幕長く地に曳きて、靜にそよ風に搖られ、その奥にまばらに立てる神杉に護られて、白砂の一

忝さに云云  
西行法師の歌に  
「何事のおはし  
ますかは知らね  
どもかたじけな  
さに涙こぼる  
る」。



宇治橋

面に敷きつめられたる間に、神神しき白木の御宮拜まれ給ふ。まづ白幕の手前なる石段のもとに跪きて、我はわが小さき祈を捧げつ。さて、傍に竝びるたる老翁、老婆が拍手を打ちては、溜息まじりに高聲に祈願を繰り返すを聞きながら、心には西行法師が忝さに涙をこぼして額づきし敬虔なる態度を思ひ浮べつ。

大宮は建築における單純の偉大を極度に現はしたるものの如く、神杉は樹木の崇高を極度に現はしたるものとい

にほひ

橋棹

筆筭



今回の事たる  
全く柄でもな  
く本意にもあ  
らず雑魚のと  
とまじりの心  
苦しさに宅に  
ては赤飯一椀  
鹽鮭一切の祝  
だに致さず候  
處かやうの御  
祝を戴き實に  
恐縮の至りに  
奉存候  
七月四日  
五十嵐力

ふべし。その杉の根方に、瑞瑞しき青苔神代のにほひを吐きて、美しく花咲けり。今日の記念にもと思へど、畏ければ手も觸れで過ぐ。御神樂殿にやあらん、折しも聞ゆる筈、筆筭の幽寂なる雅樂の音に送られて、この神境を辭し、顧み顧み宇治橋を渡る。神路山の御陰をうつし、御裳濯川の剩れる水を受け入るる水田の間の道を、車に揺られながら、この神境が大御神の大御心にかなひし故由を考ふるに、大神宮儀式帳に、

今回の事たる全く柄でもなく本意にもあらず雑魚のととまじりの心苦しさに宅にては赤飯一椀鹽鮭一切の祝だに致さず候處かやうの御祝を戴き實に恐縮の至りに奉存候  
七月四日  
五十嵐力

筆力嵐十五

度會の國は朝日の來向ふ國、夕日の來向ふ國、浪の音聞かぬ國、風の音聞かぬ國と、弓矢柄の音聞かぬ國と、大御意鎮まります國と悦びたまひて、大宮定め奉りき。

とあるを見れば、第一には、山水の景色の類なきを愛でさせ給ひしならん、第二には、地勢、氣候、風土のうるはしきを愛でさせ給ひしならん、第三には、この土地に永久なる平和の可能性ある事をめでさせ給ひしならん、最後には、皇御孫に率ゐらるる大和民族の積極的發展を見そなはさんに都合よき、氣の落ちつく境と思はせ給ひしならんなど思ひふける中に、車はいつか志摩境の名山朝熊山の麓につきぬ。

(五十嵐力―我が書翰による)

率ゐる

朝熊山

三重縣度會郡

五十嵐力

文學博士。國文學者。米澤市の

人。明治七年十

一月生まる。早

稲田大學文學部

長。

體一體

先帝  
明治天皇。

### 八 皇太子當時の今上陛下

皇太子殿下から私のまづ受けた第一印象は、その御聰明に渡らせられ、眞に帝王の御資質を備へていらせらるる事である。御性格といひ、御體格といひ、明治天皇の御面影の俤ばるる點が非常に多い。

御身長は五尺五寸位、日本人としては丈はお高い方であらせらるる。御年配の割に筋骨共によく御發達遊ばされ、眉が濃く、唇がすこし厚く、それに御聰明そのものを語つていらせらるる御眼付は、何處からお見上げ申しても、先帝の御幼年時代そつくりで、御健康も御近視眼の外は殆ど間然す

醫一医

る所があらせられぬと、侍醫の方方から承はつた。あの長い航海中一度も御食事を缺かせられた事がないのでも、普通人以上の御健康體であらせらるる事がわかる。これが何よりも國家の爲に祝しまつらねばならぬ點である。

次に御性質はと申せば、極めて御快活に渡らせらるると同時に御年配にも似合はせられぬ程御思慮深く、寛容の徳に富んでいらせらるる。例へば何かの手違で、プログラムの遅延やら變更やらある場合などでも、いまだ曾て御不満の色を浮べられた事はなく、何時も善意に解釋せられて、それは却つて善からうと、供奉の人人をお慰めになつた。エジプトのピラミッド御遊覽の日は、折悪しく稀に見る砂嵐で、衣

プログラム

Programme

釋一釈

ピラミッド

Pyramid  
埃及の古代國  
王の墳。

さうで



下殿子太皇るけ於に莊別相首スーカッエチ國英

隊司令長官に「石炭積込を見せて貰ひたい」と仰せらるると、

服が眞白になり、吹きつくる熱砂で顔も手も痛くてたまらぬ程であつたが、殿下は却つて、砂漠の本氣分が味ひ得られてよかつた」と仰せられたさうである。何事をも光明の方面からのみ見て、少しも暗黒面から見られないといふ御態度と拜察された。私の最も感動したのは、御生來仁慈の念に富ませられ、下下の勞苦に對する御同情の深いことである。東京御出發前、殿下は小栗艦

小栗艦隊司令長官  
海軍中將小栗孝三郎。

シンガポール  
マライ半島の  
極南端・シン  
ガポール島の  
南岸。英國領。

氣一気

長官は非常に恐懼して、「何分にも埃だらけで」と申し上げた。すると「いやその穢い作業を特別に見學したいのだよ」と仰せられたが、果してシンガポールでの採炭最中に、殿下は何時の間にか採炭口に歩を運ばせられ、炎天のもと、炭粉濛濛たる中にお立ちになつて、親しく人夫や水兵の流汗淋漓たる作業を御覽になつた。水兵等はこれを見て、俄に勇氣百倍して、殿下がかくまで我々の勞苦をみそなはず以上はと、互に勵ましあひ、普通二日に互る採炭も、その日のうちに立派に終了したといふ。

寫一写

今一つ私が目撃した御逸事を物語らう。一夕御召艦上で活動寫眞の御催があつて、非番の乗組水兵一同にも陪觀の

向けよう

餘一余

榮を賜うたことがある。その時、殿下及び供奉員は自然最前列に御著席になり、その背後に士官や水兵が立つて拜觀した。映寫が始まると、殿下は供奉員等に向はせられ、「どうも、うしろの兵隊達によく見えさうもないから、皆少し頭を俯向けようぢやないか」と仰せられて、御自身から、約三四十分間も、ずつと低くお頭をかがめてお出でになつた。かかることは我々人民間でさへ、餘程修養のある、且思ひやりの深い長者のみのする事で、多くは反對に自己の特權をこれ見よがしに振り廻す連中のみである。然るに殿下は帝國皇嗣の御身で、かくまでに御同情深く御謙遜にましますのを見て、私はいたく感激の情に打たれたのである。



聲一

ランス語で、それも御學問所での御課程からいふと、始めて外國人と外國語でお話しになつた事だから、これが普通の學生ならば随分氣骨の折れる事であつたらう。然るに、殿下は知つてゐられるだけのフランス語は、堂堂と大聲でお話し遊ばされた。一體殿下は非常に大きな御聲でお話しになる。ちよつと不必要と思はれるほどの大きな御聲であるが、これは臣下が二度聞き返す必要のないやうに、御幼少時代からかくは御教育申し上げ



佛國アルヴァル港御著御召艦より岩壁に御上陸

眞一眞

與へ。  
 加藤直士  
 大阪毎日新聞記者。

た爲であらう。軍艦の甲板上の御會話などには、この點は吾吾に取り頗る好都合であつた。

殿下の御俊邁に渡らせらるることは、吾吾臣民の略拜察し奉つてゐた處ではあるが、如何せん常に宮中雲深き處にまします爲に、その御性格の眞相を知るべき機會は極めて少かつた。然るに今度の御外遊により、一般國民は恰も雲霧を排して天日を仰ぐが如く、親しく殿下の御風采に接し、その御警咳に接する機會を與へられたも同然で、殿下に對して非常な親愛の情を抱き奉ることが出来るやうになつた。これが御外遊の一大副産物として、私共の實に愉快に堪へない所である。(加藤直士―御外遊陪從記による)

### 九 舊い日記

私の乏しい書棚の中に、縦三寸横四寸程の古い手帳がある。黒の堅い表紙に金版かなばんを押し、そこに金が入れてあり、小口には五色の波形のやうな彩色があつて、一寸ハイカラに出来て居る、なとと勿體らしく述べたてて來ると、どんなえらい物かと思はれるが、これは私にだけ尊いもので、外へ出したら、まづ何厘といふ價も無い、ただの反古に過ぎない。



夫 武 波 沼

それは私の日記の最も古いものである。明治十八年六月

えらい

すぢ(筋)

十四日、日曜日、一日休校也。内にて筆算をやり云云と書き始めてある。即ち私の九つの時から書いてある。私はどうしたものか、その當時この手帳が非常に氣に入つてゐたのであつた。なんでも暫く本箱か何か大切にしまつて置いた。その白い厚い洋紙は、當時の私の目には象牙を打ち平めたもののやうに見えた。私はこんな立派な洋紙を、今まで見たことがなかつた。明るい方へ向けて透かして見ると、簾のやうな明るい筋が見えた。私はまたその紙から出る品のいい匂を好んだ。刷り立ての新聞の匂も好きだが、この手帳の匂は、とても新聞などと比べ物にならぬものであつた。



勸一勸

これに日記を書けと勧めた人は、多分父であつたと思ふ。今見ると、その日記は、「修身と小學讀本を讀んだ也」「小學讀本の一を半分讀んだ也」などと、學課の復習をした事が、殆ど一日の全部の記事になつて居る。

私はこの日記を書いた頃の心持を、よく覚えて居る。なんでも復習をする事が實に厭であつた。父は「復習せよ」といふ。そして「何もやらぬなら、日記に『丸遊び』と書かねばならぬ」といつた。日記は正直に書かねばならぬものと私は教へられた。「丸遊び」と書くことは辛い。誰に見せるでもないけれども辛いのである。日記面の爲に「チョコチョコ」と少しづつ讀んだのである。ほんの少し勉強しても、何何を讀んだ也、やつた

をしへ(教)

たとひ

也と、也書きに書きつけたのである。

勉強したもので、書物の名が何何と書いてあるのは、たとひ一行でも二行でもそれを讀んだに違ないけれども、所所に「本を讀んだ也」とばかり漠然とした書き方がしてあるのは、私が小説か何か教科書外のもを、遊半分に讀んだ時であつたことを、よく今も心に覚えて居る。

又七日、土曜日、書物を讀んだ也。招魂祭と書いて、その「讀んだ也」の横に「うそなり」と後で書き添へてある。十日、火曜日、珠算をやつた也と書いて、消して「あやまり丸遊び」と書き改めである。こんな所に、いかに私がこの日記を淨玻璃の鏡のやうに思つてゐたか。又ふと嘘を書いても、氣が咎めてあとで

淨玻璃の鏡  
地獄の閻羅王の  
廳にありて、亡  
者の罪業を照し  
見るといふ鏡。

正直になほしたか。その時の辛さが今もそのままにこの日記帳に保存されてある。

それから一寸でも口實があると、その口實をれいれいと書いて、堂堂と丸遊びと書いてある。男せつく也。内にて丸遊びとか、よしなほこうの祭禮に付、丸遊びなどといふ具合だ。端午の節供に遊ぶのはそれは宜いとして、私の家とは遠く離れた東部で、徳川義直公の何年祭かがあつたとて、それで勉強を止めるとは、いかに口實を探して居たかが分る。

日記を見ると、試験が實に頻繁にある。小試験、中試験、大試験といふ稱が見える。この中試験といふ名稱が、今見るといかに滑稽である。どういふ試験を指したものか、今は全く

男せつく  
五月五日の端午の節供。  
よしなほこう  
徳川義直公。尾張藩祖。徳川家康の第九子。官權大納言に至る。慶安三年五月薨す。(二二六四年—二三二〇年)  
私の家  
名古屋市にあり

覺えて居ない。

二十年になつてからの所に、「フワイブ竝ベチャッテブレ」と書いてあるのを見て、私は失笑した。もとより五目竝ベをやつて遊んだとのことであるが、國では、「いつつならべ」とのみ云つたものである。私の祖父は碁をやつた。この祖父がいつであつたか、「五つ竝ベ」を私に教へてくれた。私は一體勝負事を一向知らなかつた。それでも「五つ竝ベ」の外に、繪雙六とトランプぐらゐは教はつて居たが、繪雙六のやうな偶然に勝負の附くものは宜いが、上手、下手のあるものでは、私は總べて下手であつたから、すぐ厭になつてしまつた。

「五つ竝ベ」といへばよいのを、「フワイブ竝ベ」などと氣取つ

トランプ  
Tramp  
ぐらゐ。

沼波瓊音

名は武夫。名古屋市の人。文學者。俳人。第一高等學校教授。昭和二年七月歿す。(二五三七年—二五八七年)

たのは、その頃英語を習つて居たからである。

(沼波瓊音—凡人に聴け)

私の子供が青桐の木に昇らうとしてゐる。子供は全身的に幹に抱きついて、春を丸くして三四尺程やつとの事で昇る。若木の青桐は空に擴げた若葉を、梢の方でびりびりと軽く顫はしてゐる。子供は顔を真赤に染めて、瞳を黒く光らせながら、又五六尺の處まで昇つて、暫くちつと怵へてゐたが、するするとすぐに滑り落ちて了ふ。子供は滑り落ちて了ふと、暫くの間は胸を小鳥のやうに膨らませながら、木を高くと仰いでゐる。子供は意を決したもののやうに、上衣を地面に投げつけて、今度は勢猛に昇り始める。兩手でしつかり木を抱きしめて、踵を木の肌につけて、遮二無二昇つてゆく。が、子供の體は二尺昇つては一尺すり下り三尺昇つては二尺すり下る。そして五六尺の高さまで行つて力が盡きたのか、又するすると地上に滑り落ちる。(前田夕暮)

鳥取驛  
鳥取縣鳥取市。

### 一〇 湖山長者

山陰線の鳥取驛から、西の方へ三里あまり行くと、鏡のやうな大湖水がある。湖山池こやまといつて、周回四里近くもあらう。西南の方には、丘陵や小山が波のやうに起伏して、春は爛漫と咲いた紅白の花に彩られ、夏は滴る樹樹の翠に潤され、秋は燃え立つ紅葉をもつて飾られる。東北の方には田畑が廣廣と連り、砂の丘を隔てて、遙に漫漫と開いた碧の海を望むことが出来る。かやうに山と海とのえならぬ眺を兼ねたうへに、湖の面には、時時蘆荻の生ひ茂つた間に、鷺鷥の閑眠を貪るのが見え、また仙人めいた舟子の、綱を擧げて細鱗を捕

をか(丘)

かやう

蘆—荻

るのが見える。景色の雅なこと、誠に一幅の名畫を展げたやうな趣がある。

今は昔、このあたりに湖山長者といふ名高い豪家があつた。住家は王侯の宮殿のやうで、その中には金銀財寶が積んで山をなして居た。著るには美しい綾錦があり、食ふには山海の珍味があり、使ふには數十百人の婢僕があり、そして所有の田地は、見渡すかぎり廣廣と稻の波を打つて居た。誠に天下の富を此處に集めたかと思はれるばかりで、世の中の事何一つこの長者の思ふ儘にならぬものはなかつた。

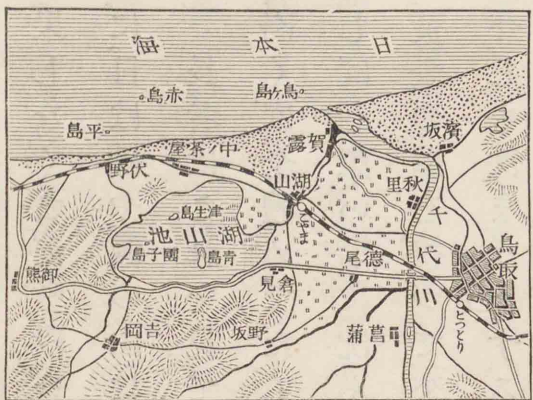
ある年の夏の田植時のことである。湖山長者の家では季節中の最上吉日を卜して、この廣田に田植をすることにな

寶—宝

綾—綾

たう。田植

使はれて



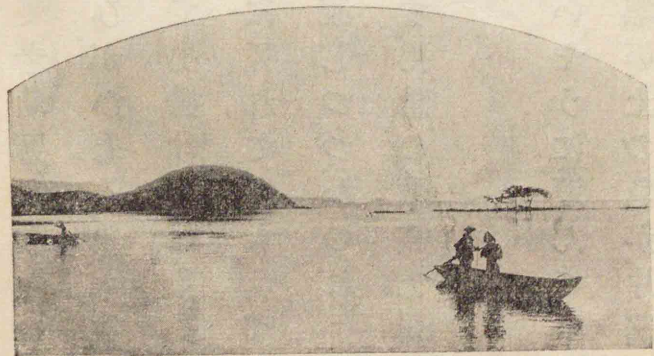
つた。長者の家に使はれてゐる者は勿論、近郷近在の者どもまで、「今日こそ長者の田植だ」といふので、老幼男女數をつくして、身仕度かひがひしく、我も我もと田圃をさして出掛けて行く。長者は高殿の欄干に凭れて、目も及ばぬ田地を遙に見渡しつつ、おのれが限ない富に、思はず得意の微笑を漏してゐた。

仕事は面白いやうに運んで、早苗を取る男女の手の動く度毎に、濕つた黒い土の色が、片端から青く青く變つて行く。そのうちに正午になつた。やがて夕

變—交

暮近くなつた。仕事はめきめきと運んだが、名に負ふ長者が  
 廣い田地のことであるから、植ゑるに  
 果しなく、まだ數段を残してあるうち  
 に、日ははや西の山に入らうとした。

長者はこれを見て、ああ今少し日が  
 高くば全體めでたく濟まうものをと、  
 しばし深い思に沈んだが、つと立つて  
 黄金の扇を持つて來て、さつと開いて、  
 今しも沈まうとする夕日を三度まで  
 さし招いた。



池 山 湖

あふぎ(扇)

見る間に、山の端にかかつた夕日は三段ばかりのぼつて

來た。田に立つた村人等は、天道様を左右する長者の威力を  
 見て、いかに驚いたであらう。かくして、これまでと思つた田  
 植も思ふままに拂つて、その日も無事に暮れた。

寢覺の牛の聲がゆるやかに響いて、夏の短い夜はやがて  
 明けた。朝の床を起き出た長者は、入日を招き返した喜と心  
 驕りとで、眼中いよいよ何ものもない。傲然とした態度で召  
 使や村人を呼んで、昨日一日で植ゑあげた田の様子を見て  
 來いと命じた。ところが、出掛けて往つて、誰一人腰を抜かす  
 ばかりに驚かぬ者はなかつた。

驚くの無理はない。

見よ、さしにも廣かつた長者の田地は迹形も無くなつて、

みづうみ(湖)

漫漫とした湖が、朝の嵐に白い波を立てて居るではないか。數千人で一日植ゑつけた早苗が、一本も見えないで、渚には群れ立つ蘆が、波に洗はれ風に戦いで居るではないか。長者の家は、この時から一日一日に衰へた。そして遂にこの廣い田とおなじ運命をもつて亡びてしまった。

(五十嵐力―趣味の傳説)

衰へた

おなじ

驕るもの久しからず。(俚諺)

驕る平家に二代なし。(俚諺)

奢るものは末世の厄介。(俚諺)

奢は三年の費。(俚諺)

榮耀に餅の皮むく。(俚諺)

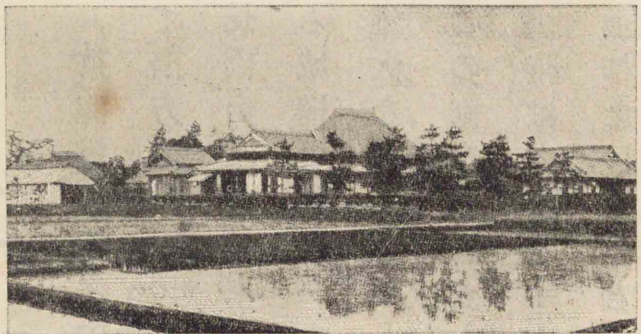
### 一一 日本一の百姓

堀之内驛  
静岡縣小笠郡

東海道線堀之内驛で汽車をおりて、更に輕便軌道によつて、南方池新田に至る縣道に沿うて二里ばかりを行き、一大長橋を渡つて東南の方を望めば、水田を隔てて白堊端然たる城構の如き一大邸宅を認めるであらう。その結構の壯麗雄大なることは、人をして目を瞠らしむるものがある。話はこの家を舞臺として展開する。

時は大正十年六月十日、梅雨に入らうとして雨雲の低く垂れた日のことである。この家の主人松本喜作氏は朝早くからそわそわとして落ち著いて居られなかつた。邸内の掃

そわそわ



松本喜作氏邸

き清めから座敷の飾付等に忙しさうに立ち働いて居た。勝手元からは賑かな婦人達の笑聲が洩れる。御馳走の支度を急いで居るのであらう。主人は十二疊半の奥座敷に賓客の數だけの座蒲團を敷き並べ、ところどころに煙草盆を配置した。それから磨きのかかつた櫛の一枚板の大床を丹念に艶拭しては、ひとり口元に満足の悦を漂はせて居た。

夕方五時になると、主人の待ちかねて居た賓客が集まつて來たのである。

たがひに(互)

話は三十年の昔に溯る。遠州灘と駿河灣とを劃る御前崎といふ漁村に近い處に、地頭方村といふ村がある。ここに鈴木といふ物堅い農家があつた。學校の休暇中のことである。ある日この家に三人の青年が集まつた。三人の青年は夜を徹して互に未來の希望を語り合つた。

音に名高き遠州灘の波濤の音が靜寂を破つて響くけれども、熱し切つた三人の耳には何等の響も感じなかつた。その中に一番年長の篠田といふ青年が威張り出した。逞ましい二の腕を露はして、左の手で軽く一つ二つ叩いて、

「貴様等この腕を見い。とにかく一高で鳴した兄さんだ。俺

はこの腕で今に總理大臣になるんだ。さうすると、貴様等を大いに引き立ててやるから有り難く思へ」と傲語すると、今一人の一番歳下の青年が、

獻  
獻

「篠田、何をいふんだ。總理大臣では事が小さい。俺は空中を化學の力で征服して無を有とする。日本はおろか世界の大學者となり、前人未發の事を發見して社會に貢獻するんだ」といひ放つた。それはこの家の鈴木といふ青年であつた。

餓  
ゑる

今一人の青年松本も黙しては居なかつた。貴様等はそんな大言壯語を發するが、その法螺が何時まで續く。恐らく五六時間の後には空腹を訴へて、餘り大きな聲も出まい。俺は日本一の米作りとなつて、日本の中に餓ゑる者がないやう

にするのだ」と豪語した。

それは互に眞劍の問題で、決してその場の座興ではなかつた。

し  
ょう

「面白い、それぞれ目的がきまつたら、成功の曉には立派な別荘を造つて、互に招待しようぢやないか」と、松本が提案すると、さうだ、面白い」と、三人は思ひ思ひに未來の成功を夢みつつ、元氣よく語り合つて立ち別れた。

政治家になるといふ篠田は如何に。學者となると叫んだ鈴木は如何に。篠田氏は高等學校、大學を出て法學士となり、間もなく旅順攻圍軍の國際顧問となり、韓國併合の後には平安南道に久しく内務部長を勤め、今はその長官として、令



勵 励

名噴噴たるものがある。今日の會合はその際であつた。その後論文を提出して法學博士となつた。

Vitamin  
ヅ  
タ  
イ  
ミ  
ン  
決 決

然らば、學者になると誓つた鈴木氏は如何に。刻苦勵精の結果、大學を最優等で出て、間もなく二十七歳にして農學博士となり、獨逸に留學し、今は東京帝國大學農學部教授として農藝化學に於ける權威と崇められ、盛名を全世界に馳せてゐる。サルチル酸やヱィタミンの發見をなし、最近日本酒の合成に成功したのは世人の知悉する所で、つまり最も年少の鈴木氏が第一決勝線に飛び込んだのである。

松本氏の辿つた路は、その目的の如く農であつた。氏はまづ東京駒場の農科大學の乙科に入つたが、在學わづかに一

か  
へ  
る  
(歸)

年半ばかりで退學し、故郷に歸つて實地に農業に就いた。實に氏の二十歳の時である。鈴木、篠田の兩友が各青雲の志に燃え、最高學府目がけて邁進してゐるのに、何故に氏は途中で學業を止めたか。これには深い理由がある。

時は明治二十三年の七月、第三回内國勸業博覽會が開會中であつたので、上京した父と共に見物のため上野公園に赴いた。すると、丁度向から静岡縣下で茶業王とまでいはれた丸尾文六氏を先頭に、その一家の人人が愉快らしく語り合つて來るのを見た。松本氏は父に向つて、

む  
か  
ふ  
(向)

「お父さん、向から丸尾さんが來ますから會ひませうか。」といふと、

「避けよう。こんな見すばらしい風では、あの人達に會ふのはいやだから。」

この一語を父から聞いた氏は、今更の如く自家の腑甲斐なさを痛感したのであつた。よし、この後は石に嚙りついてもやつて見せる。向が茶業王なら、自分は百姓王にならねば置かぬ。一身を賭して事をなしたら、出来ぬといふ事はない筈だ」と氏は心中に叫んだのであつた。かくて悠悠三年の在學はもどかしかつたので、僅に一年半、農學の大要を學ぶと退學して、そして一百姓として奮勵刻苦、遂に日本一たるに至つたのである。

そこでまづ約束の別莊建築に著手し、前後五箇年にして、

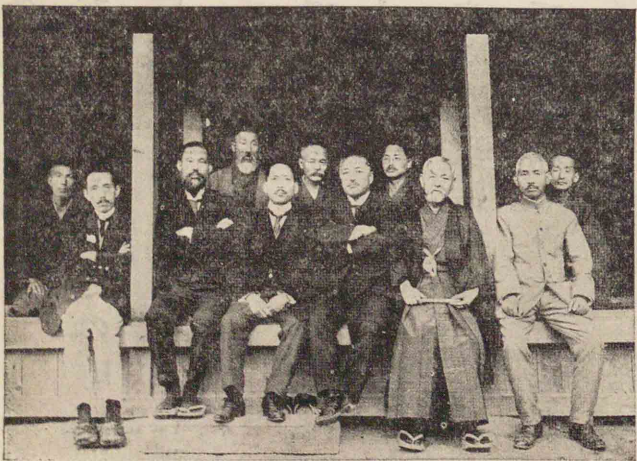
かじる(嚙)

まだ全體の結構布置を完成するまでには至らぬが、友人を招くに足るだけの設備を大方整へた。

時恰も篠田氏が朝鮮から急に上京したので、その機會に取り敢へず、三十年前少年時代の盟約を果すべく、茲に宴を催したのである。

まづ賓客を別亭の高閣に案内して楽しい宴は開かれた。主人として松本氏夫妻は末席に膝を並べ、挨拶として、

敢へず



招宴きたれ人人向つて右より五人目  
篠田氏 七人目 鈴木氏 八人目 松本氏

「回顧すれば年少血氣のころ、鈴木君の家に集まり、未來を語り合ふたことは三十年の昔であるが、今その時が至つて、皆様の御來駕を得たのは、野生一期の面目これに過ぎるものはない。」

との旨を述べると、満座寂として深い感に打たれた。

篠田氏まづ起つて祝辭を述べ、私は日本一の政治家たるべく、今も尙努めて居るが、私のやうな政治家は多い。然し松本君のやうに農村にのみ居つて、事を成した人は珍しい」と、その勤勞を賞讃した。

鈴木氏も、「私も日本一のもりでは居るが、博士には日本一が澤山あるから、私一人が日本一といふ譯には行かぬ。然

し、松本君のやうに實地の仕事から磨き上げた實際の農業家こそ、眞に國の寶である」と、これに和した。

これを初めに歡語、笑聲盛に起り、和氣騷々として堂に満ち、只もう愉快愉快と連呼するの外はなかつた。その時の床の懸物が、

「有志者必成。」

の一軸であつたことは、頗るこの場合に意味のあるものであつた。(新井友吉―日本一の百姓による)

新井友吉  
雑誌「日本農業」  
「産業」の主幹。

余は煙を愛す、田家の煙を愛す。高きに踞して、遠村近落の煙の相呼び相應じつつ、悠悠として天に上りゆくを見るごとに、心すなはち樂しむ。(徳富蘆花)

一二 スパルタ武士

昔ギリシヤにスパルタといふ國ありき。國民愛國の精神燃ゆるが如く、武勇のほまれ今なほ高し。而して、スパルタ人の教育の方法と生活の状態とを聞くものは、この聲譽の偶然にあらざるを知るべし。

スパルタ人は悉く武士にして、男子生まれて七歳に達すれば、國立の教育所に收容せられ、王子、王族といへども家庭に人となるを許されず。その教育は、身體の鍊磨と士氣の養成とを主とし、日常の學課は體操、武術、劍舞、軍樂等にして、讀み書きの如きは、餘力を以てこれを學ぶに過ぎず。

Sparta  
半島にあり。  
西曆前五世紀  
頃ギリシヤの  
覇權を握れ

いへども

劍劍

もちゐる(用)

耐ふ

教育所における少年、青年の生活は、専ら廉潔、質素、克己、忍耐の氣性を鍛鍊するを目的とし、その規律は頗る嚴格なるものなりき。寝ぬる時は僅に一枚の敷蒲團を用ゐるのみ。その蒲團は、河邊の蒲の穂を集めてみづからこれを作らざるべからず。衣服は重ね著を許さず。冬もなほ徒跣にて靴を穿つを得ず。毎日河水に浴して温湯を用ゐることなく、食物も亦極めて粗惡にして飽食することを許されず。これ他日戰場に出でて飢渴に耐ふる習性を養はんが爲なり。  
言語は簡明を貴び、饒舌を誡む。故に今日においても、西洋諸國にては、言語の簡單明白なるを、スパルタ人の答といへり。又謙讓と從順とは、スパルタ武士の最も重んずる所にし

闊一潤

て、長幼の序正しく、未成年者は路を行くにも、兩手をマントの下に入れ、視線を地上に垂るるを禮とし、揚揚闊歩するを得ず。公民は總べて未成年者を懲戒する權利を有し、懲戒を受けたる未成年者、若しこれをその父兄に告ぐる時は、父兄は更にこれを懲戒する義務あり。

二十歳に達すれば、始めて共同の教育所を出でて公民の列に入る。しかも、武藝の練習は終生これを怠るべからず。公式、祭儀の席には、老若相合して武勇の歌を誦す。老人まづ聲を上げて、「我等は嘗て武勇なる壯者なりき」と歌へば、壯年これに次ぎて、「我等こそ今はそれなれ。知らぬものは、いざ試みよ」と歌ふ。少年亦これに和して、「我等はやがて更に武勇なる

嘗一嘗

鍛はれ

瓦となりて云云  
北齊書に「寧玉  
碎すべきも、瓦  
全なる能はず」。

壯者たるべし」と結ぶ。

かくの如き尙武教育に鍛はれたるスパルタ武士は、死を



士 兵 の ヤ シ リ ギ

見ること歸するが如く、瓦となりて全からんよりも、玉となりて碎けんことを希ひ、祖國の爲に一命を棄つるを以て、無上の名譽とせり。ここに、スパルタ武士の面目の一端を見るに足るべき二三の美談を記さん。

おほひて

敵の軍勢山野に滿ち、大小の軍旗空をおほひて天日見えずとの報に接し、大將自若として曰はく、「然らばその蔭に戦

はん」と。

「敵勢雲霞の如くその數を知らず」といへば、一將喜んで曰はく、「敵勢大なる時は、我等の名譽も亦隨つて大なり」と。一將又曰はく、「我等は敵軍の數を知る要なし。唯その所在を知れば足れり」と。

數數

「敵軍將に寄せ來らんとす」と報ずるものあり。將軍叱して曰はく、「敵我に寄するにあらず。我敵に寄するなり」と。

スバルタ人の忠勇義烈なるは、ひとり男子のみにあらず、女子も亦この美德を分てり。一婦人その子の出陣に際し、自ら盾を取りてこれに授けて曰はく、「勝ちて持ち歸れ。然らずんばこれに乗りて歸れ」と。

さづく(授)

失ひ。

ある時の戰に、一時に五子を失ひたる母あり。人あり、來りてこれを告ぐれば、まづ勝敗の如何を問ふ。我が軍勝てり」と聞きて、喜んで曰はく、「我が子は祖國の爲にこれを産めり」と。

(國定讀本)

巨彈折しも橋立の砲塔内に裂け、廣重二等兵曹は頭と胸とに重傷を負ひ、あつと叫んでうち倒れたが、やがて渾身の勇氣を振つて、再び旋回機柄に取りつき、きつと敵艦を睨んだ。血は滾滾として事業服のあちこちに緋牡丹の花を印し、既に半ば死んでゐる彼は、唯忠義の一念凝つてその柄を把りは把つたが、もう聲も出ず、身體もきかぬ。或兵員が「代りませう」といつたが、それが普通兵だと知つて、彼は頭を振つて肯んじない。その中一兵曹が驅けつけた。おい廣重、おれが代るから安心しろ。それを聞くと、始めて彼の顔に安堵の色が浮び、兵曹がしかど柄を把るを見るや、ばつたり倒れて息絶えた。(小笠原長生)

### 一三 海舟の苦學

勝海舟若き頃西洋式の兵術を學びしが、舶載の兵書極めて少く、常に良き書の得がたきを歎ぜり。偶市中の書肆を過ぎて新刊の一書を見、これを購はん



勝海舟の名は安芳、舊幕の傑士。のち海軍卿を経て、樞密顧問官となり伯爵を授けらる。明治三十二年一月薨す。(二四八三年―二五五九年)  
ぎと思ひてその價を問へば、「五十兩」と答ふ。當時書生の身分なれば、五十兩の金は直に得らるべくもあらず。十數日を経て辛うじてこれを調へ、勇んで書肆にゆけば、かの書は既に賣れてなし。海舟遺憾に禁へず、買ひたる人を問へば、四谷に住める與力某なりと。即ち

勝海舟  
名は安芳、舊幕の傑士。のち海軍卿を経て、樞密顧問官となり伯爵を授けらる。明治三十二年一月薨す。(二四八三年―二五五九年)

禁へず

聽かず

至誠 海舟



海舟筆

歩を轉じてこれを訪ひ、切に情を陳べて兵書の譲りわたしを請ふ。某聽かず。已むを得ず借覽を請へども、なほ聽かず。乃ちいはく、晝間は足下に要あらん。夜間寝ねたる後は貸さるとも不可なかるべし。と。某その執拗に驚き、答へていはく、夜更けて後は貸すとも可なり。然れども戸外に持ち去ることを許さず」と。海舟その翌夜より通勤を始む。

當時海舟は本所に住み、某の家は四谷に在り。相距ること殆ど一里半。されど風雨烈しき時も、曾て往復を廢せず。又一夜もその時刻を差へ

をふ(了)

辭一辭  
つひに(遂に)

ず。かくの如くすること半年餘にして、遂に入卷の兵書を手  
寫するを得たり。乃ち更に主人に面會し、全部を寫し了へた  
ることを告げてその厚意を謝し、かつ二三の不審の點を舉  
げてこれを質す。主人驚いていはく、僕は寫すべき勞もなき  
に、足下の如くいまだ全部を通讀するに至らず。實に慚愧に  
たへず。野人寶をもてりとも何にかせん。請ふ、この書を足下  
に呈せん」と。海舟既に寫せる一部を有すればとて、再三固辭  
したれども、主人聽かず。遂にこれを受けぬ。(海舟言行録)

これまではなみの男と思ひしに

五尺にたらぬししやくなりけり。(海舟)

### 一四 夏二篇

#### 一、庭

萩の若葉の心しんのところところに油蟲がついて居る。又それに蟻  
が群つて居る。よく見ると、油蟲は時時痙攣を發したやうに



高濱 虚子

動いて居る。蟻はその上を無造作に  
這うて居る。これは結局どちらの勝  
に歸するのであらう。萩は一體おれ  
をどうするつもりだといつたやう  
に、痒さうに首筋をもたげてぢつととして居る。

その萩の下に蟻が塔を造つてゐる。梅雨が大地をぼこぼ

ぢつと



こと柔かくしたその土を山のやうに積み上げて居る。何匹とも數知れぬ蟻がその山の上を右往左往にさまようて居る。五六匹の蟻が頭を突き合はして何か談合してゐる様子であつたのが慌しく連れ立つて巢の中に這入る。又連れ立つて巢の中から出て來る。

聞える

何處やらに蠅のうなる聲が聞える。

生え。

庭の芝生に菌が生えて居る。毎年梅雨の頃にはこの菌が生える。白い小さい菌で、一所に十ばかりもかたまつて生えて居る。また芝生には小さい草花が生えて居る。それはかうやつて芝生にしゃがんで居ると、始めて目に入るやうな小さい花である。小さい莖の尖に白い小さい蒼がついて居る。

様—様

はへ(蠅)

小さいといへば芝の尖に一つ一つ宿つて居る露は馬鹿に小さい。裳裾や下駄を濡すのはこの露だ。それよりもいよいよ小さいのは菌の傘の端に宿つてゐる露だ。傘の端がぎざぎざになつてゐる、その一つ一つの尖にある露だ。

白い蝶が三匹もつれて、松の樹の向に飛んで居る。

一番電車が通る。

雨氣がすぐ近くの山の上に迫つて居る。隣の松の樹をも露が包んで居る。

芝生に様様の蟲がゐるのに氣がつく。その中に小さいばつたが居る。これは赤ん坊のばつたであらう。私の下駄の影を恐れて逃げまどふ。他に芝にしがみついて居る一匹の蠅

殖えた

えり(襟)

が目にとまる。その二つの黒い眼が馬鹿に大きい。蝶が殖えた。七八匹も松の樹の間を飛んで居る。一匹は私の背中のあたりを飛ぶ。

芭蕉の雫が襟元に落ちる。熱帯の病をこの雫が持つて来たやうな心持がして、ぞつとする。青梅が三つ、つぶらになつて居るのが目立つ。その他にもなつてゐるであらうが、青葉に隠れて見えぬ。

二番電車が通る。(高濱虚子—朝の庭)

二、畑

私は唐黍の葉がすきである。その實を取るのが望ならば、あまり肥料をやらぬ方がよい。然し見事を葉を見ようと

高濱虚子  
名は清。愛媛縣の人。俳人。小説家。明治七年二月生まる。雑誌ホトトギス主幹。

おほく(多)

やうやう

らば、なるたけ多く施した方がよい。

書齋の窓に沿うた小さな畑に、私は毎年この唐黍を植ゑる。今年合間合間に向日葵を植ゑて見た。兩方とも丈の高くなる植物で、一方はその葉が長く、一方はその花が大きい。



若山牧水

一年中さうではあるが、夏は別し

て私は朝が早い。窓を開けて椅子に倚る頃、戶外がやうやう薄あかるくなつてくる。そのさやかな東雲の微

光の中に、伸びるだけ伸び盡したこの二つの植物が、一つは黒ずんで見えるまでの青い葉を長長と垂れて立ち、一つは今朝にも咲き出たやうに鮮かな純黄色の大輪の花を空に

點一

向けて咲いてゐるのを見ると、全く眼のさめる思がする。刃のまくれた光の鈍い青龍刀のやうな葉と、磨き立てた金盃の輝をもつた花とは、朝の畑の異彩である。  
夕方になつて、窓からさした電燈の光で見ると、唐黍の葉の兩側には點點として露の玉が宿つて居り、尙よく見ると、その葉の眞中にちよこなんと一疋の青蛙が坐つてゐる。不思議にこの葉にはお客様が來て居る。

(若山牧水―樹木とその葉)

若山牧水

名は繁。宮崎縣の人。歌人。昭和三年九月歿す。(二五四五年―二五八八年)

芭蕉葉や風なきうちの朝すすみ。(史邦)

唐黍にかげろふ軒や魂まつり。(酒堂)

蟻かよふや大向日葵の天邊に。(金童)

### 一五 笑話三則

#### 一、梨泥棒

寓話作者ラ、フォンテーヌは、毎朝食事後果物を食べる習慣であつた。或朝のこと、あとでと思つて、一箇の梨を煖爐のかざり臺の上へ載せて置いて、一寸書齋へ往つた。その中に一人の友人が來訪したので、その室へ通した。彼が書齋から出てその室に來て見ると、件の梨が見えぬ。おや、誰か梨を食べたのかしら。友人は何食はぬ顔で、僕ではないよ。君でなくて幸だ。實は鼠を退治しようと思つて、あの梨に亞砒酸を入れて置いたのだ。友人は驚いて、そりや大變だ。解毒劑は無い

ラ、フォンテーヌ  
佛國の人。(西  
曆一六二二年  
―一六九五  
年)

食はぬ

和田垣謙三

法學博士。多才にして語學に長ず。帝國大學法農科の教授に歴任す。大正八年七月歿す。(二五二〇年—二五七九年)

かといふと、安心したまへ。今のは梨泥棒を見出す爲の計略なんだ。」

二、老病で

或人その奉侍する君主の逆鱗に觸れ、汝の罪死に當る。覺悟せよ」といふ嚴命を蒙つた。その人は、額を地にすり附けて、「どうぞ命だけは御助け下さるやうに」と歎願に及んだ。それは相成らぬ。しかし死方は汝の選擇に委す。如何なる方法で死にたいか即答せよ。その人畏る畏る頭を舉げて、昔に變らぬ御慈悲あり難く存じます。願はくは老病で死にたうございます。王は失笑して、遂にその命を助けられた。

(和田垣謙三「西遊スケッチ」)

擇一択

即一即

フェアリー、クイーン

Faerie Queene.

エドマンド、スペンサー

Edmund Spenser.

ノーサムプトン侯

Northampton.

英國の詩人。その作「牧羊者の曆」及びこの「フェアリー、クイーン」等は最も傑作と稱せらる。(西曆一五五二年—一五九九年)

三、詩人を逐ひ出せ

「フェアリー、クイーン」と題する長篇は、英國古代の文學社會に盛名を馳せた詩家、エドマンド、スペンサー氏の著である。はじめ、氏がこの長篇の稿を脱するや、これを當時の貴族ノーサムプトン侯に呈した。

侯は受けて、これを誦すること數句に及ぶと、執事を召して、この詩人に賞として二十磅を與へよと命じ、更に誦すること數十句、愈感歎して再び執事を召し、尙二十磅を與へよと命じた。それから進んで誦すること百餘句に及ぶと、ますます感興を加へるので、三たび執事を呼んで、二十磅を與へよと命じた。然るに、侯は誦するに随つて妙味を感ずること

市島謙吉

春城と號す。新潟縣の人。早稻田大學名譽維持員。

愈深く思はず案を打つて歎賞の末、又しても執事を呼んだが、今度は二十磅を與へよといはない。却つて意外にもスペンサー氏を指さし、「一刻も早くこの詩人を逐ひ出してしまへ」と命じた。打つて變つた命令に驚いた執事は、何かその詩篇のうち、御氣に障る所でもありませんか」と怪しみのあまり主人に問ふと、侯は頭を振つて曰はく、「さうではない。この詩篇を誦すれば誦するほど、その巧妙さに釣り込まれる。その度毎に二十磅づつを與へてゐたなら、恐らく全篇を讀み終らぬうちに、余が家は破産すると思ふからだ」と。

(市島謙吉「蟹の泡」)

### 一六 最後の授業

うへ(上)

鐵—鉄



芳 幽 池 菊

いつもの通り、僕は學校へ出かけて往つた。今朝は天氣はほかほか暖かいし、そのうへ空はからつと晴れてゐる。森のはたではお喋舌の黒鳥が囀り、牧場では、木挽小屋の後の方でプロシヤ兵が調練をやつてゐる。

村役場の前を通りかかると、小さな鐵柵のある揭示場の前に大勢の人がたかつて居た。二年この方ありとある不吉の報知や、負けた戰報や、徵發の事や、プロシヤ方のいろいろの命令や、そんな厭なものがみんな

此處から來たのだ。また何かあるんだなと考へながら、足も止めず、僕はアメル先生の小さな校庭へ這入つて往つた。開いて居る窓から見ると、僕の仲間はもうみんな銘銘の腰掛に竝んで居て、アメル先生は恐しい鐵の定木を抱へ込みながら、その前を往つたり來たりして居られる。僕はそつと這入つて僕の机の前に坐つた。

僕は、アメル先生が青色の上等のフロックを着て、綺麗に襟の所で襷を取つた笹縁のシャツをつけ、參觀日か賞品授與式の時でなければ、被ることもない縁取の黒の絹帽を被つて居られるのに氣がついた。そればかりか、教場には何か非常の事でもありさうで、嚴かな空氣が滿ち渡つて居た。

フロックの略  
Frock coat  
シャツ  
Shirts

讀一読

しかし一番僕の驚いたのは、教場の奥の方の、いつも空虚な机の前に、村の人が僕等とおなじく黙つて坐つて居るところだつた。その人達の中には、三角帽を被つたオーゼー爺さん、前の村長さん、前の競賣吏員さんなどが居た。そして、この人達はみんな悲しさうな顔をして居るのだ。オーゼー爺さんは、縁の蝕んだ古いABCの讀本を持つて來て、それを膝の上に乗せ、大きな眼鏡を開いた頁の上に置いて居た。

僕が驚いて居る間に、アメル先生は講座に上られた。そして、優しい、しかも嚴格な聲で僕等にいはれた。

「俺の子供達、これが御前達に俺の教へる最後の授業だ。ベルリンから命令が來て、エルザスとロートリンゲンの小

ベルリン  
Berlin  
府  
ドイツの首

エルザス、ロー  
トリンゲン  
佛國領なりし  
が、西曆一八  
七〇年普佛戰  
争の結果、ド  
イツに屬せ  
り。

しまひ。  
みじめ

學校では、ドイツ語の外教へてはならぬといつて來たのだ。新しいドイツの先生が明日著くことになつて居る。今日はフランス語の教へじまひだから、俺はお前達に一所懸命聞いて貰はなければならぬ。

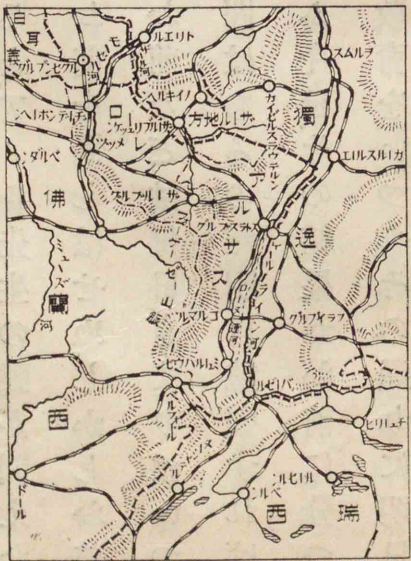
この僅ばかりの詞が、僕をあつと動轉させた。ああ何といふみじめな情ない事だ。村役場の揭示はその事だつたのだ。

僕のフランス語の學びしまひ。その僕はまだろくろく書く事さへも出來ないのだ。もう僕は習ふことも出來ないと思ふと、學校を休んで禽の巢を探し廻つたり、河で氷滑りをしたりして、無駄に費した時間が今更怨めしくなつた。つい今の先まで、重がつて荷厄介にした教科書も、今となつては

盡し

別れのつらい舊い友達のやうな氣がする。

先生が取つておきの著作物を著て來られたのも、この最後の授業に敬意を表する爲だつた。村の老人達の様子も、今までこの學校へ度々來なかつたことを悔むやうに見えた。この人達の來たのは、四十年もこの小學校に居て、立派に職務を盡してくれた僕等の先生に、感謝の意を表する爲でもあつたし、また失はれた祖國に對する義務を盡す爲でもあつたらしく思はれた。僕がこんな事を考へて居る時、僕



## 罰

の名を呼ばれたのに気がついた。僕の誦する番が来たのだ。僕は眞はじめの言葉にまごついてしまった。胸が一杯にこみ上げて来て、顔を上げること出来ず、腰掛から立つたまま身體の權衡を取つて居ると、アメル先生の聲が聞えた。「フランツ坊や、俺は今日はお前を罰しはせぬ。しかしお前は罰せられるのが當然だ。お前などは毎日きまりにいつて居たことだ。『いつでも時間はあるのだ。明日勉強すればいい』と。どうだな、今日といふ今日、その結果がお前に分つたらう。全體エルザス人の教育を、いつもその通りに明日に延ばして居たのが、エルザス州の何よりの不幸だつたのだ。今になると敵國の奴等はいふだらう。『何だ、貴様達は

## 傳へた

それでもフランス人だといふのか。フランス語が書けも讀めもしない癖に』と。それに何と返事が出来る。」  
先生の言葉はそれからそれへと盡きなかつた。先生は、フランス語は我々の先祖からも傳へた大事な詞だから、我々はこの詞をよく護つて、決して忘れてはならぬ。假令一國民が奴隸の境遇に落ちようとも、その國の詞を護つて居る間は、丁度牢屋の鍵を持つて居るやうなものだと説かれた。そして、先生は文典を取つて、僕等に讀んで聞かせられた。僕は自分でよくそれが解つて往くのに驚いた。先生の説明が、實によく僕の頭に這入つて往くのだ。僕はこんなによく先生のいふことを聞いて居たこともなければ、先生もこん



なに辛抱して説明されたことも無かつた。どうも、この氣の毒な先生は、ここを去られるに就いて、自分の知つて居るだけの事を、一度にみんな僕等の頭に詰め込んで往かうとなさるやうに思はれた。

をはる(終)

その課目が終ると、今度は習字の稽古に移つた。先生は特別に僕等に渡して下される爲に、新しいお手本を用意して來られた。そのお手本には、美しい丸い字で「フランス、エルザス。フランス、エルザス」と書かれてあつた。

銘銘がどんなに一所懸命、字を習つたか見せたいやうだつた。一番年の往かぬ生徒等さへ、一心にちやんと覺悟して、これもまだフランス語だといふ風に、習字の線をわき目も

振らず引いて居た。

屋根の上では、鳩が低い聲で咽喉を鳴して居たが、僕はそれを聞きながら考へた。鳩もドイツ語で啼くやうに教へられるのかしら」と。(菊池幽芳「幽芳集」)

菊池幽芳  
名は清。水戸の人。小説家。明治三年十一月生まる。大阪毎日新聞記者。

國民の愛國心を磨滅せしめんとするには、その人民が本國の歴史を讀むことを妨げ、又本國の國語を使用せしめず、他國語を教ふるを以て極めて巧妙なる策略とす。露西亞が中央亞細亞の人民をなづくるにも、即ちこの策略を用ゐたるなり。この點より觀察すれば、その國の歴史と國語とを教ふるは、國民の愛國心を養成するに最も必要なこと愈明瞭なるべし。余故にいはいはく、國典の講究は國民教育上必要缺くべからざるものなり」と。(井上毅)

御殿場  
静岡縣駿東郡

### 一七 富士山

八月二十四日午前零時、富士山に登らんとて御殿場を發す。月はいま足柄山の頂を離れて、三尺ばかり天に上れり。その明かなること恰も晝の如し。

そもそも富士山は四面かけ拂の山にて、摺鉢を伏せたる形したれば、いづれの方面にも登山口あり。東は須走及び中畑に、南は須山に、西は大宮にありて、皆駿河に屬し、北は吉田にありて甲斐に屬せり。山の腰より頂上までを十合に分つ。一合の距離は、路の難易によりて長短定まらず。合の界に石室を設けて、登山者の休泊所となせり。今わが登らんとする

須走、中畑  
静岡縣駿東郡

須山、大宮

静岡縣富士郡  
吉田  
山梨縣都留郡

をみなへし  
(女郎花)

は中畑口なり。

玉蜀黍や芋の葉の影の、長く短くうつれる畑道を行き過ぐれば、爪先あがりの草原なり。山百合、女郎花、撫子など咲きみだれ、露きらきらと光りて無数の玉を飾り、蟲の聲繁くして雨に似たり。

行くに隨ひて、はじめは仰ぎ見し足柄、箱根の連山も、愛鷹あしたかの諸峯も、次第に低くなりて、岡の如く堤の如く、はては平地の如し。ただ富士山のみ夜霧の奥に巍然として聳え、我を喜び迎ふるものの如し。

風甚だ寒し。午前二時頃ならん、瀧川原の一軒茶屋に立ち寄りて、盛に火を焚きて煖を取る。

瀧川

愛鷹  
静岡縣駿東郡

いはゆる

こすゑ(梢)

馬返まではなほ山の麓にて、いはゆる裾野なり。ここより先は、路嶮しければ馬も利かずとてこの名あり。いつしか樅、檜などの林の間をゆく。月影梢を洩れて鹿子斑の雪かと疑はる。

太郎坊にて金剛杖を買ふ。白木にて長さ五尺。ここを出づれば木盡き草稀に、見渡すかぎり、コークスのやうなる焼石、焼砂なり。生物の聲全く絶えて、只わが砂を踏む足音のみ虚空に高く響く。この山、俗に「草山三里、木山三里、禿山三里」といへるが、木山の五合目まで續けるは吉田口に限り、他は大概二三合目までなりと聞く。

一合目に到れる頃、夜は頂上より明けそめて、次第に麓の

うるほす(沾)

寶永山

寶永四年十一月  
噴出す。高さ二  
七〇〇米突。

六根

眼耳鼻舌身意を  
いふ。

あふぐ(仰)

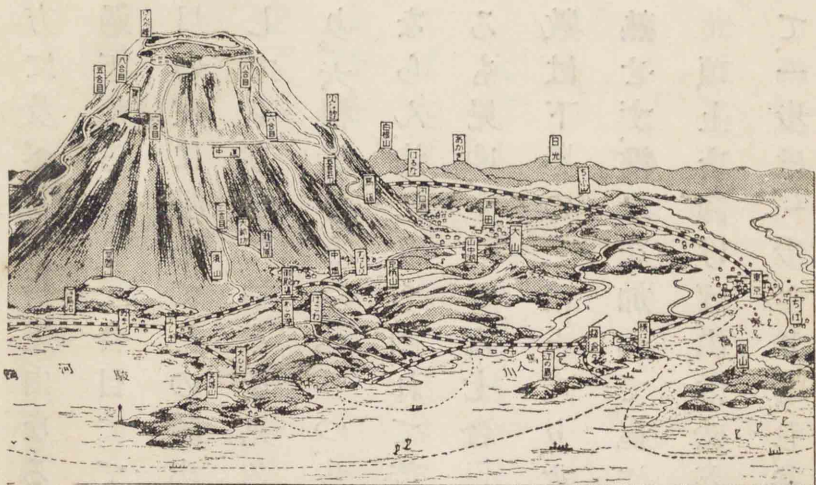
方に及べり。折折眞白なる水氣襲ひ來りて衣を沾すは、雲の過ぎたるなり。三合目にて須山口の路と合す。寶永山は六合目の左に敲ちて、その噴出坑と相對せり。忽ち白鷺の點點として下方遙に動くを見る。近づけばみな白衣の富士道者なり。六根清淨と唱へつつ、歩調緩かに上りゆく。山に酔ひたるならん、途にうち倒れて苦しめるを、同行の人の頰に介抱するも見ゆ。すべて六七合目以上は空氣稀薄なれば、人の呼吸數は下界の二倍となり、火氣も亦弱くして、飯を焚くによく熟せず、糯米を加へて纔に粘力を添ふとぞ。

頂上を仰げば、山は殆ど落ちかからんばかりに聳え立ちて、一步は一步より嶮し。谷めきたる凹みに雪あり。潔うして

齒一齒

おろか

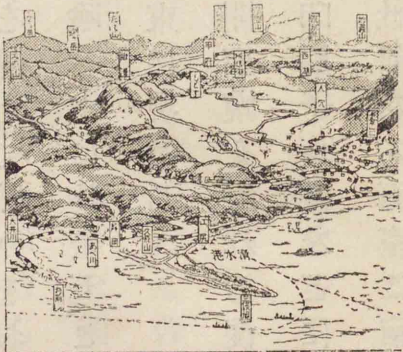
八峯  
劔峯、馬背嶽、  
雷電嶽、釋迦嶽、  
藥師嶽、經嶽、  
駒嶽、觀音嶽



碎けたる銀の如し、勇氣を鼓して掘り取りてこれを嚙む。齒牙に徹りてつめたし。八合目よりはいはゆる胸突八丁にて、岩石の間に路なき路を求めて上るなれば、胸を突くはおろか、ようせずば、岩にて額を撲つべく、衣を裂くべし。路の窮りたる處に梯子二つかかれり。午後一時遂に頂上に達す。頂上には八峯環りて立てり。劔が峯最も高し。ここに氣象觀測所

缺一欠

嘯一嘯



あり。八峯の中間には、周回十五六町もあらんと思はるる一大噴火口の迹あり。昔はここに水ありて、池を成したりきとか。噴火口の外部を巡るを御鉢めぐりと稱す。その途中、北に金明水、南に銀明水の二泉ありて、盛夏も涸ることなし。又東に缺間ありて蒸氣を噴出す。地に手をあてて試みるに熱し。三十分にて鶏卵を蒸し、酒を爛すべし。今や天に近づくこと一萬三千尺。杖を岩頭に立てて長く嘯けば、風起つて、雲の飛ぶこと頻なり。足柄、箱根の山山は蟻

山中、河口  
 山梨縣都留郡。  
 本栖  
 同縣西八代郡。  
 富士川  
 日本三急流の  
 一。山梨縣笛吹  
 釜無二川の合  
 流。富士山の西  
 を過ぎて海に入  
 る。  
 三保の松原  
 静岡縣安倍郡。

木花開耶姫  
 瓊瓊杵尊の妃、  
 大山祇命の女。

埜の如く、山中、河口、本栖の諸湖は杯水の如し。銀の針と見ゆるは富士川か。青き絲と見ゆるは三保の松原か。駿河の海相模の灘は二つの鏡を竝べたるが如くに光り、末は天と一つになれり。試に掌を開いて掩へば、山も水も皆わが手中に藏る。忽ちわが對へる空中に富士山の影現はれたり。裾は山に互り水を越えて敷州をおほひ、色は紫紺にして優美鮮麗なること喩へんに物なし。これを御影と稱す。朝日には西に、夕日には東に現はる。

木花開耶姫を祀れる淺間の本社を拜す。神官に乞ひて杖には烙印、扇子、葉書などには朱印を捺す。

薄暮社前なる石室に宿る。屋根の高さ九尺ばかり、太き木

疊一疊

出づ

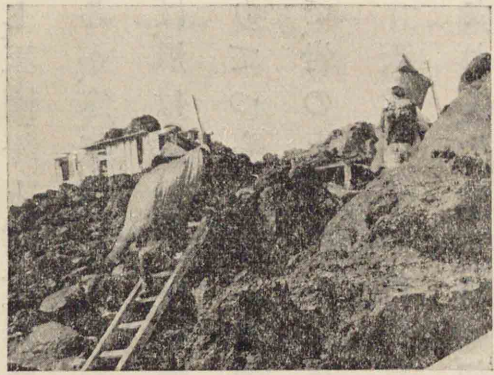
こほり(氷)

くれなる(紅)

を骨組とし、岩に倚りて石を疊みて造れり。廣さは二十疊もあるべし。あらかき板敷の中央に爐を切りたり。醴酒を名物とし、三國一と稱す。携へたる布子を著、蒲團二三枚重ねて寝たるが、寒氣強くして目も合はず。未明に起きて戸外に出づれば、風は錐のやうに膚を刺し、使ひ棄てたる水は片端より氷りてつららとなれり。乃ち立ち戻りて、蒲團を身に纏ひて出で、岩の上に踞して日出を待つ。

天は清く晴れたれども、脚下は薄黒き雲の波一面にはびこれり。その雲綿の如し。見る見る東の方ばつとあかく、紫となり、薄紅となり、遂に深紅色となる。さて瞬くひまに朱盆の如き日はさし昇りぬ。忽にして百千筋の金光きらきらとし

て八方に散じ、天地全く明かなり。



(嶽が駒) 頂山士富

降り路は須走口を取れり。六合目より太郎坊までの間、砂のうへを滑走して下るを走はじと稱す。一度躍れば杖も足も止るところを知らず。只風の耳朶に觸るる聲を聞くのみ。この間に草鞋を破ること四足。木山を過ぎ裾野を通りて、須走に著きたるは二十五日の午前九時なり。登るには十餘時間を費ししもの、降るには僅に二三時間。快なること甚し。

裾野の月頂上の日出、御影、これを富士山の三大壯觀とす。

わらぢ(草鞋)

金子元臣

東京の人。國文和歌を以て著はる。明治元年十二月生まる。御歌所寄人、國學院大學教授。

我はいま一舉してこれを併せ見ることを得たり。富士の岳神の我を愛して、この稀なる幸を與へ給ひしにやあらん。

(金子元臣)

アルプは見果てのつかぬお花畑の夢幻郷だ。足の踏み處もない程に咲く草花に身を横たへて雪山を仰いでゐると、森の端に栗鼠が音を立ててゐる。谷よりそよぐ風は遙なる牧童の歌を夢幻の中に送り、山は嶮しき面持をもて胸深く刺す。何といふ莊嚴なる造化の神祕であらう。六月も半ばを過ぎて、アルプを渡る風のきびしさも柔らいで來る時、峠の茶屋や展望の山のホテルなどが、一齊に戸を開き、竈の煙を上げて、訪ふ人を待つ。登山鐵道も山麓の傾斜面を這ひ出して上下する。リュックサックを擔いだ男女の群が、アルペンローゼの花を帽や胸にかざして、峠から峠へと歌つてゆく。皆強い高山の氣に打たれて、腕も顔も赤い。(横有恒)

河井醉茗  
名は又平。大阪府の人。詩人。明治七年五月生まる。

をどる(踊)

一八 山の歡喜 (河井醉茗)

あらゆる山が喜んでゐる。  
あらゆる山が語つてゐる。  
あらゆる山が足ぶみをして、  
舞ふ踊る。  
あちむく山と  
こちむく山と、  
合つたり  
離れたり、  
出てくる山と

とほく(遠)

かくれる山と、  
低くなつたり  
高くなつたり、  
家族のやうに親しい山と  
他人のやうに疎い山と、  
遠くなり  
近くなり、  
あらゆる山が  
山の日に歡喜し、  
山の愛にうなづき、  
今や



河井醉茗

山のかがやきは

空一ぱいにひろがつてゐる。(醉茗詩集)

岩崎彌太郎がまだ少年の時或日友達と里山の頂上から海を眺めてゐた。青畳を敷いた海上に、近くは網曳く漁船が三つ四つ五つ、遠くは大阪通ひの千石船も見える。おい皆見給へ、綺麗ぢやないか。僕等が大きくなつたら大きな船乗にならうぢやないか。彌太郎がいふと、いやだよあの波が荒れて見給へ、それこそ大變だ。と朋輩はいふ。何だ、君達は意氣地が無いな、海を渡るのは丈夫な船を造つて、うまく空模様を調べさへすればいい。陸地だつて大地震があれば家なんか引つくり返るぢやないか。後年の海上王彌太郎の言はかうであつた。

(逸話の泉による)



(葦堂玉合河) 後 雨



多摩川  
山梨縣丹波川の  
下流。東京府に  
入り、荏原郡羽  
田村に至り海に  
入る。

えん(縁)

### 一九 驟雨浴



徳富 蘆花

西は本氣に曇つた。雷様も眞面目に鳴り出した。もう多摩川のみかうは雨が降つて居るであらう。自分は大いそぎで下りて、庭に乾してあつた仕事著や跣足袋を取り入れた。風がひやりとした。日傭の婆さんも大いそぎで干麥や麥稈を取り入れて居る。

座敷の南縁に立つて居ると、ぼつりと一つ大きな白い粒が落ちて、乾いて黄粉のやうになつた土にころりと轉んだ。次いで大粒、小粒、小粒、大粒、かはるがはる斜に落ちては、地上

Towel タオル

さわぐ(騒)  
あらふ(洗)

にもんどり打つて團子のやうに轉がる。二本松のあたりは薄墨色に掻き消されて、推し寄せてくる白い驟雨の進行が、目に見えて近づいてくる。自分は久しく海員の海上生活を羨んで居た。總員入浴用意の一令で、手早く著物を脱ぎ棄て、石鹼とタオルとを兩手に持つて、眞黒の健兒共がずらり甲板に竝んだところは、面白い見物であらう。やがて雷鳴電光よろしくあつて、錨索大の雨の棒が瀑落しにどうどうと來る。さあ今だ。總員驚の如く立ち騒いで、大いそぎで石鹼を塗る、洗ふ。大洋の眞中で無錢湯が開かれるのだ。ぐづぐづすれば、石鹼を塗つたばかりの斑人形を残して、いたづらな驟雨はざあと驅け抜けて

澤 沢

帶 帶

しまふ。四方水の上に居ながら、バケツ一杯の淡水にもありつかれぬ海の子等に、蒸溜水の天水浴とは、何等贅澤の沙汰であらう。不幸にして、自分は海上ならぬ陸上に居る、熱帯ならぬ温帯に居る。壯快限なき甲板の驟雨浴は眞似られぬが、自己流の驟雨浴なら出來ぬことは無い。やつて見るかなと、手早く浴衣を脱いで眞裸になり、つと走り出て、芝生の眞中に棒立に立つた。ぽつり肩を撲つ。脳天までひやりとする。またぽつり、またぽつり。そのたびに、肩や腹や背中がひやりとする。好い氣持だ。しかしまだ夕立の先手で、手痛くは遣つて來ぬ。

まじなひ禁厭

「これを冠つていらつしやい。」  
 といつて、妻は硝子の大きな鉢  
 を持つて來た。硝子は電氣を絶  
 縁するといふので、雷除の禁厭  
 に冠れといふのだ。よしと受け  
 取つて、いきなり頭に冠つた。黒  
 眼鏡を掛けた毛だらけの裸男  
 が、頭に硝子鉢を冠つて直立不  
 動の姿勢を執つたところは、新  
 式の河童である。不圖思ひつい  
 て、自分は頭上の硝子鉢を仰むけにし、  
 兩手で支へて立つた。



(筆蝶一英) 圖 の 雷 落

進一逆

あぎとふ

一つ二つ三つと三十ばかり數へると、取りおろしてぐつと  
 一氣に飲み乾した。やはらかな天水である。二たび三たび興  
 に乗じてこの大觴を重ねた。  
 「もう上つていらつしやい。」  
 妻がかう呼ぶ頃は、夕立の中軍まさに殺到して、四圍は眞白  
 になつた。電がぴかりとする。雷が頭上で鳴る。ざあざあと落  
 ちて來る太い雨に身の内は撲たれぬ處もなく、ぐつと息が  
 詰る。驟雨浴もこれまでと、灌の如く進る樋口の水に足を洗  
 はせて、身震ひして縁に飛び上つた。  
 上ると、どしや降になつた。庭の平たい甕の水を、雨が亂れ  
 撲つて、無數の魚兒のあぎとふやうに跳ね上げて居たが、そ

あわて(周章)

れも最早見えなくなつた。  
しばらくして、夜の明けるやうに西の空が明るくなり出した。あがり際の織い雨が白絹絲を閃かす。一足縁に出て見ると、東南の空は今眞暗である。最早夕立の先手が東京に攻め寄せた頃である。二百萬の子の、周章てふためく態が眼に見えるやうだ。

何時の間にか、ぱつたり雨は止んで、金光いかめしく日が現はれた。見る見る地面を流れる水が止つた。風がさつと西から吹いて来る。庭の青松がばらばらと雫を散らす。何處かで鯛がかなかなと心地好ささうに鳴き出した。

ゆ。ふだち(夕立)

時計を見ると二時三十分。夕立は唯三十分續いたのであ

湿—湿

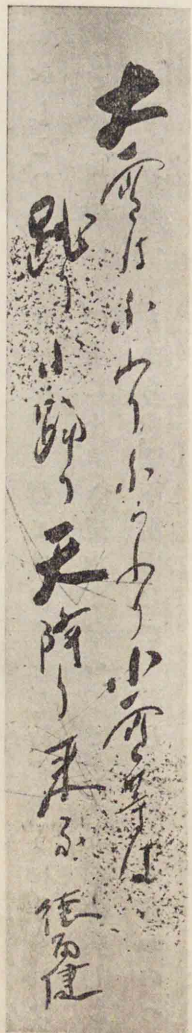
Cosmos  
コスモス

大雪はふわり  
ふうわり小雪  
等は跳り小踊  
り天降り来る  
徳富健

高尾、小佛  
共に東京府南多  
摩郡。

つた。

浴衣を引き掛け、低い薩摩下駄を突っかけて畑に出た。さしも乾いて居た畑の土がしつとりと濕つて、玉蜀黍の下葉や、コスモスの下葉が、刎ね上つた土まみれになつて、重げに



筆花 蘆富徳

垂れて居る。何處を見ても嬉しさうに緑が戦いで居る。東の方では雷がまだ鳴つて居る。

「虹收仍白雨、雲動忽青山。」

かく打ち吟じつつ西の方を見た。高尾、小佛や甲斐の諸山は

濃淡の碧も鮮かに、富士も一筋白い豎縞の入つた淺葱の浴衣を著て、すがすがしく微笑して居る。

たはこと

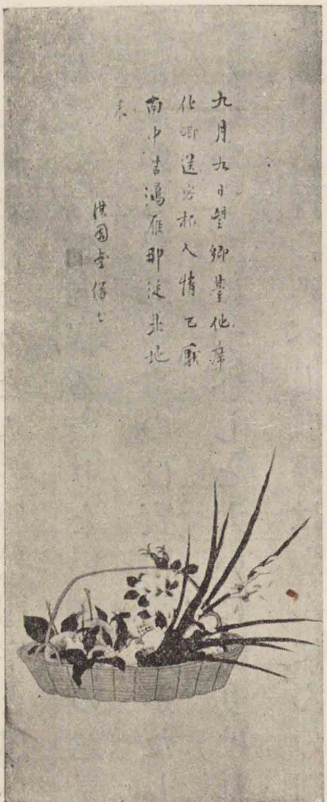
蝸がまた一聲鳴いた。(徳富蘆花—蚯蚓のたはこと)

雨のおもしろきは燕子花、花菖蒲、溪蓀などの咲き出づる梅雨頃なるべし。これらの植物の花弁と葉とは自ら雨を防ぐやうに作られたるを以て、雨滴はその上に小さき玉水となつてとどまり、その美しさ、洵に形容し得べくもあらず。驟雷雨雨などの激しき雨にも亦おのづからなる植物の配合はあるなり。それは多く雨しげき地に生育する植物、又はさる地方より移し植ゑられたる植物にして、彼の梧桐の如きはその一例なり。その直立して膚青き幹、その淺く切れ込みたる廣き葉の、一は特に洗はれて鮮緑の色を増し、一はばらばらと音立ててその葉末より餘滴を滴らす光景は、よくこの植物のかかる急雨に適せるを見るべし。(三好學植物の景觀)

## 二〇 狂夫の言

### 一、 かにん

或人、文盲なるものを意見して、「世の交は他の事はいらす。



柳澤洪園筆

ただ堪忍の二字をよく守るべし」といふ。文盲の人首を傾け、「かにんと

は四字にて侍らずや」と指にて數へ、「御許には思ひ違ひなるべし。かにんの四字にて侍り」といふ。意見したる人「愚昧の



れば、この人のありしにはあらねども、愚公がいふやうなることは、世に愚なりといへば愚公と名づけ、智叟がいふやうなることは、世に智なりといへば智叟とは名づけけるならし。

およそ天下のこと、愚公が如くならば、遅くとも一たびは成就すべし。然るに、世に智ありと稱するほどの人は、大方智叟が心にて、愚公が山を移すやうのことを聞きては、その愚を笑ふほどに、何事もその功を成就せぬなるべし。されば、世のいはゆる愚は反りて智なり、世のいはゆる智は反りて愚なり。それ故に、禦寇が世を諷してこそかくはいひつらめ。

(室鳩巢—駿臺雜誌)

室鳩巢

名は直清、通稱新助。江戸の人。儒者。初加賀侯に仕へ、後幕府に仕ふ。享保十九年八月歿す。(一三一九年—二三九四年)

一一 消息二篇

一、朝鮮飴

先日御惠投下され候朝鮮飴、本日相開き申し候處、この前のととは格別の風味、折からの親類客、是非にとて半箱分配、大天狗に御座候。

實はこれ程とは思はざりしに、餘り氣に入り嬉しく存じ候故、わざわざ一筆認め、改めて謝意を表し申し候。十五日の觀劇會にて、もし御目に懸り申すべく候はば、ゆるゆる御物語致すべく候。草草。(尾崎紅葉)

二、小生の銷夏法

尾崎紅葉

名は徳太郎。又十千萬堂と號す。小説家。東京の人。紅葉全集六卷を遺せり。明治三十六年十月歿す。(一五二七年—二五六三年)

あさがほ朝顔

雪の朝人も珍  
らし吾もまた  
篁村

拜復。温泉宿は目白の如く押し合ひ、海水浴は鰯の寄せ  
たるに似て押し返し、山間は馬蠅うるさく、海邊は赤痢  
の恐しさ、夏中はぢつと蟄して在宅罷り在り候が小生  
の銷夏法に御座候。殊に近來珍草家と相成り朝顔培養



篁村筆

を一大事業と致し、朝疾くよりこの珍客と向ひあひて  
樂しみ、日中は手づから水を御馳走し、暮際は夜會草、月  
見草と相手代ればなかなか多忙にて、蚊の食ふ頬を叩  
く暇もなき程なれば、暑いと申し居り候事もこれなき

饗庭篁村

名は與三郎。東京の人。文學者。劇評家。大正十一年六月歿す。(二五一年—二五八二年)

一葉舟

藤村の初めて公刊したる詩集。

木曾  
長野縣。

島崎藤村

名は春樹。長野縣の人。明治五年二月生まる。嘗て佛國に遊ぶ。小説詩集等の著甚だ多し。

次第に候。右御答まで。(饗庭篁村)

三、秋 涼

一昨日歸宅致し候處、御手紙届き居り、拜眉を得候心地にて拜見致し候。一葉舟御覽下され候由、あまり拙きもの、さりとは赤面の至に御座候。

木曾にては單衣に羽織にてまだ寒きほどの氣候なれば、秋の茸もほつぽつありて、姉が馳走の松茸飯など、田舎の風情に候ひき。御地もこの秋はまた如何ならん、東の都とは異なる趣も多からんと想像致し居り候。

この秋よりは一層讀書筆紙に親しむつもりに御座候。

(島崎藤村)



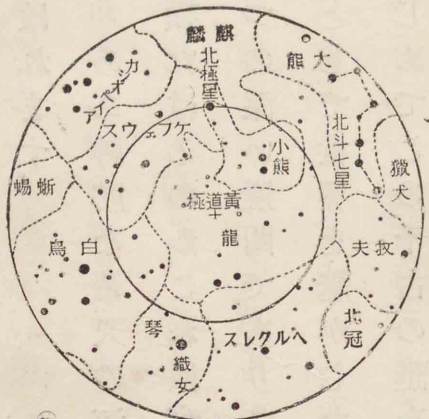
## 二二 天の河

観—観

涼みがてらの星話は、誰でも経験する所であります。とりわけこの頃は、天空に牽牛、織女の二大星が白く輝き、その間に、蜿蜒と南北にかかつてゐる天の河の壯觀は、七夕の美しい話を知らない人にさへ、いひ難い喜びを覚えさせます。

夏の夕の天の河は、南北にとよく人がいひますが、正確にいふと南北ではないのです。正しい北方にゐる例の北極星に向つて、少しく右手の低い地平線から、天の河は始まるのです。それからだんだん頭上へ延びてくるに連れてその幅がひろがります。日本の中央部で、ちやうど眞直に、我々の頭

唱へ



北極星の位置

の上に光つてゐる一等星が、即ち琴座の首星で、西洋人は、これをヴェガと呼び、支那では、昔から織女と唱へました。

眼を轉じて、琴座の東南を見ますと、廣くひろがつた天の河を隔てて、そこに大きな白星が一つ輝いてゐます。これが例の七夕の話で、織女に配せられる牽牛であります。

天の河は、月の明るい夜には、全く消えさうな薄い光の帯であり、その幅の或は狭く、或は廣く、光の程度も濃淡さまざまです。

長く南北につづく有様は、全く洋洋たる大河の流を見るやうで、燦爛たる星のまたたきは、さながらその漣のやうに思はれます。

ああ神祕なる天の河。何故にこの不可思議なものが天に横たはるのか。これは實に昔から、いづれの國人も抱いた一つの深い疑問でありましたが、十七世紀の初、新學の開拓者として世界を驚かした偉人ガリレオは望遠鏡を用ゐて、はじめてこの千古の謎を解きました。それは、一つ一つの微星の密集團であることでした。

ガリレオ以來今日まで、天文家は繰り返し繰り返し天の河を觀察しました。その中でウィリアム・ハーシェルが、最も

ガリレオ

伊太利著名の  
天文學者。西  
曆一五六四年

年）

ウィリアム・ハー  
シェル

獨逸著名の天  
文學者。西  
曆一七三八年  
年）

効効

偉大なる效を挙げました。ウィリアムは天の星の數を數へ盡して、始めて天のすべての星數が、天の河へ近づけば近づくほど増加し、その極端に増したものが、天の河そのものであるといふ事を知りました。然らば、星は何故に天の河へ向つて集中してゐるのでせうか。ウィリアムの説によれば、この大宇宙は、幾千萬といふ星の集合團體で、その集合の形は、平板上に擴がつたものと考ふべきである。そしてわが太陽系は、全體のおよそ中心に位置を占めてゐることになつてゐる。この平板上に集つた全體の形を、輿行の長い方に深く透視したものが、我我からは天の河と見えるのであり、その反對に、天の河から最も離れた方角が、星の重なり方の最も

淺一淺

淺い、即ち奥行の短い方面であるといふのです。

解一解

ウイリアム以後今日まで、多くの學者が、天の河と、その中にある星の並び方を研究しましたが、やはり大體の觀念は、今も猶ウイリアムの考と變りません。然し更に精細に觀察すると、幾多の疑問があつて、天の河は只簡單に集まつた星の團體ではないらしくも思はれるのです。實に天の河ほど、古い昔から謎であり、又今日も猶解くあとからあとからと、新しい謎の増してゆく不思議なものはありません。

山本一清  
理學博士、京都  
帝國大學教授。

夏の夜、空を眺めながら古い昔の天文のことを考へ、また遠い宇宙のはてを思ひ浮べながら天の河を見るのも、人間ばなれのした面白いものです。(山本一清一週刊朝日)

### 二三 雀

私は雀を觀てゐます、常に觀てゐます。雀は全くかはいい。彼は全く素朴で誠實です。極めて神経がこまかで伶俐で、時時慌てて、うぶで單純で、それはあどけないものです。簡素な雀の生活に親しんでゐると、自然に人間の心もつつましくなります。單純になります。そしておとなしく素直になつてしまひます。私の葛飾の生活は固より簡素を旨としましたので、猶更雀によく似たその日その日を送りましたが、誰でも本當に雀の聲に聴き入つた時には、その時だけでも俗念を離れて、すがすがとなり、さういふ尊い瞬間は無論誰

葛飾  
千葉縣東葛飾郡  
地方の汎稱。  
なほ(猶)

すまひ。

にも必要なのです。

人間のある處には必ず雀はゐます。雀のある處には必ずまた人間はゐます。殊に古くから人間の住ひしてゐる處には、必ず雀も古びてゐます。一つの里があれば、その里には、必ず人間にも草分の一人の祖先があつ



北原白秋

たやうに、雀にも草分の雀といふものが必ず一羽はあつた筈です。人間の血脈が古くなればなる程、雀の血脈も古くなつて、相共にその親しさの度も深くなるばかりです。

青田つづきに、蓮田の白い蓮の花が咲き盛る葛飾あたりの晩夏には、碧い空を雀も軽く飛び翔ります。ちゅつちゅつ。

涼—涼

時時白い蓮の花にすれすれに、翼と尻尾とを一緒にくぎりをつけて飛び抜けたり、すぐ側の瑠璃色の露草の花がいつばいに咲いた、肥溜の屋根の上などへ轉げていつたりします。その露草にも、朝は涼しい白露がいつばいです。其處でも雀はまた二羽三羽と寄り合つては、さも涼しさうに頬つぺたを小さな片足でぶるぶる振ひます。青蛙も飛び跳ねます。蟲も鳴きます。全く世の中は涼しい。

遠くの大都會の空には大きな煙突が幾百本となく林立して、眞黒な煙が一面に渦巻く物凄さも、雀の聲をたよりにして、白い蓮の花の向に離れて見れば、却つて親しく、如何にもこの世が頼もしく戀しく感ぜられます。その野原の一本

肥の

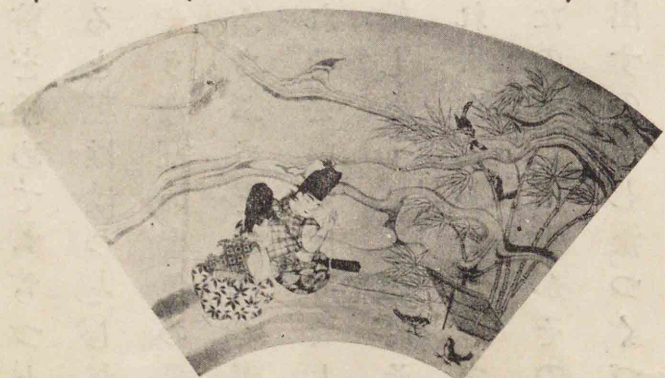
道を、手を振つて来る郵便脚夫の姿も、やつぱり懐かしい世相の一つでせう。肥溜の屋根の雀も、見馴れた脚夫の姿を見ると、嬉しさうにちゅつちゅつとお辭儀をします。何かのたよりが欲しさうに。

またある朝、私が散歩をしてゐると、雀がはらはらと一羽飛んで來ました。其處には木槿の垣根がありました。雀はその枝にとまらうとすると、ついとそれて、又はらはらと斜に向の萱屋根の方へ飛んで行きました。見ると、その小枝には、白いすがすがしい木槿の花が、たつた一輪咲いてゐたのであります。雀の飛んで來た機縁から、私ははじめて其處に木槿の花の存在を知り、その花がまた枝と共に、幽かに見え

くらゐ

るか見えないぐらゐに揺れてゐるのが分りました。風が幽かに吹いてゐたのでした。このこまかな感覺、このこまかな自然のわななき、この閑寂の境地に突然創造されたその白い木槿の花、その花の幽かなる律動。

また或日の午前のやや冷たい空氣のうちの事でした。畑を歩いてゐると、一羽の雀が玉蜀黍の間を、幽かに羽裏を光らして、ひらひらと風に吹かれて、うしろ向に流れて來ました。それは程よい初秋の微風に吹



(經寫面扇) り と 雀

ちぢめて(縮)

かは(皮)

かれて、半ばはすがすがしさうに、わざと翼も羽ばたかないで、斜に吹かれて來るのでした。と、雀が首を縮めてちぢつと鳴きました。又ちぢつと鳴きました。見ると、私ははつとしたのでした。其處には玉蜀黍の燃え立つやうな紅い金色の垂毛が、新鮮な淡い緑の實の皮の上からふさふさと垂れて、揺れそよいでみました。幾つも幾つも揺れそよいで居りました。雀はその紅い垂毛に觸れ觸れして、嬉しさうに、その時その時に一つづつ羽ばたいて、また吹かれ吹かれして行きました。雀はその玉蜀黍の毛と遊んでゐたのでした。雀がその毛に觸れると、その毛は一層紅く搖ぎ出すのでした。つくづく見上げると、その長い葉も、その莖の上の新しい花穂も

何の木云々  
芭蕉の句「何の木の花ともしらず句かな」

北原白秋  
名は隆吉、福岡縣柳河町の人。詩人。明治十八年一月生まる。

動いてゐました。その上の青空までがまた幽かに動いてゐました。何といふ澄みわたつた、そして新鮮な青い高い空でしたらう。

ほきりと向で誰やらが玉蜀黍を一つもぎました。そしてまた元の静けさに還りました。

ひとり林間などを心靜に徘徊してゐると、よく雀の鳴聲が耳につきまます。その聲が耳につく拍子に、また何の木の花の匂とも知れず、幽かな花の香が流れて來るものです。芭蕉はかういふ神祕の世界に、しみじみと靈を開いて聽き入つたものかと思ふと、自然と掌が合はされます。

(北原白秋―雀の生活)

疾うに

### 二四 犬ころ

ボチは朝起だ。僕の起きる時分には、もう疾うに朝飯もすんで、ひとつきり遊んだところだ。が、僕の聲を聞きつけると、何處に居ても一目散に飛んで來る。



二葉亭四迷

僕が急いで庭へ降りるところを、ボチは透かさず泥足で飛びつく。細い人參程の赤ちやけた尻尾を、懸命に掉り立てて、嬉しさうに顔を見上げる。見おろす。目と目とぴたりと合ふ。たまらなくなつて僕が横抱きに抱く。ボチは、抱かれながら身を

もがいて大暴れに暴れ、僕の手を舐め、胸を舐め、頤を舐め、頬を舐め、舐めても舐めても舐め足りないで、悪くすると口まで舐める。父が顔をしかめて「汚い汚い」といふ。なるほど考へて見れば、汚いやうではあるけれども、しかし僕は嬉しい。止められない。

これが濟むと、ボチもやつと氣が濟んだといふ形で、また庭先をうろろうろしだして、縁の下などを覗いて見ると、其處に草履蟲の一杯たかつた古草履の片足か何ぞがある。好い物を見附けたと言ひさうな面をして、それをくはへ出して來て首を一つ掉ると、草履は横飛びにぼんと飛ぶ。透かさず追っかけて行つて、又くはへてはぼんと抛る。そんなたわいはふる(抛)

くはへ

はふる(抛)

もない事をして、活潑に元氣よく遊ぶ。その隙に僕は顔を洗ふ、飯を食ふ。それが済むと、今度は學校へ行く段取になるのだが、この時が一日中で一番僕の苦痛な時だ。ポチが跡を追ふ。うつかり出ようものなら、何處までも何處までも附いて來て、逐つたつてどうしたつて歸らない。

こつそり出ようとしても、出掛ける時刻をちやんと知つて居て、その時分になると、何時の間にか玄關先へ廻つて待つて居る。仕方が



犬 ころ (筆雪 蘆澤長)

しまひ。

したふ(慕)

かはいさう

ないから、しまひには取つつかまへて、否應なしに格子戸の内へ入れて置いては出るやうにして居たが、さうすると前足で格子を引つ搔いて、悲しい悲しい血を吐きさうな啼聲を立てて迹を慕ふ。姿が見えなくなつても啼きやまない。僕もそれは同じ思だ。泣き出しさうな顔をして、ばたばたと駆け出し、聲の聞えない處まで來て、漸くほつとして、なみの歩調になる。そしていつも心の中で、繰り返し繰り返しこんなことを思ふ。

「僕がゐないと寂しいもんだから、それであんなに迹を追ふんだ。かはいさうだなあ。僕は學校なんぞへ行きたくはないんだけれど……行かないと阿父さんが『ポチを棄て



てしまふ』つていふもんだから、それで仕様が無いから行くんだけれども……。」

じやんじやんと放課の鐘が鳴る。今まで静かだつた校舎内が、俄に騒がしくなつて、彼方此方の教室の戸が前後してあわただしくばつばつと開く。と、その狭い口から、眞黒な塊がどつと廊下へ吐き出され、崩れてばらばらの子供になり、我がちに玄關脇の昇降口を目がけて駆け出しながら、口口に何だかわめく。只もう校舎をゆすつて、「わあ」といふ聲のなかに、無数の圓い顔が、黙つて大きな口をあいて躍つてゐるやうで、何をわめいてゐるのか分らない。で、それが一旦昇降口へ吸ひ込まれて、此處でまたごたごたと入り亂れ重なり

辨  
弁

合つて、腋の下から木椎頭がひよつと出たり、反齒へ肱がぶつかつたり、靴の踵が生憎と負傷した足を踏んだりして、上を下へとこね返した揚句に、わつと門外へ押し出して、東西へちりちりになる。仲よし二人、肩へ手を掛け合つて行く前に、辨當箱をぽんと抛り上げては、ちよいと受けて行くいたづら者がある。その鄰は、往來の石ころを蹴飛ばし蹴飛ばし行く。誰だか、あとで遊びに行くよ」とわめく。蝗を捕りに行かないか」といふ聲もする。友達が皆道草を喰つて居る中を、僕一人は駆け抜けるやうにして、脇見もせず、せつせと歸つて来る。

家の横町の角まで来て、くすぐつたいやうな心持になつ

驅<sub>一</sub>駈  
おどけ

て、そつとその方角の方を見る。果してポチが門前へ迎へに出  
て居る。僕を見附けるや、逸散に飛んで来て飛び付く、舐め  
る。何だか「兄さん」といはれたやうな氣がする。もし本包と辨  
當箱と草履袋とで、兩手が塞がつてゐなかつたら、僕はこの  
時ポチを捉まへて、どうしたかわからないが、それがあるば  
かりに、どうすることも出来ない。據なく頭を撫でてやるだ  
けで、不承不承また歩み出す。と、ポチも忽ち身を曲らせて、横  
飛にひよいと飛んで驅け出すかと思ふと、立ち止つて僕の  
顔を見ておどけた眼色をする。追ひ付くと又逃げて、又その  
眼色をする。かうしてふざけながら一緒に歸る。

玄關から大きな聲で「只今」といひながら内へ驅け込んで、

さらひ

澁<sub>一</sub>洪

いきなり本包を其處に抛り出し、慌てて辨當をあけて、今日  
のお菜の残と稱して、實はたべたかつたのを我慢して、半分  
残して來たのをポチにやる。それも足りないとおやつにお  
煎を三枚貰つたのを、せびつて五枚にして貰つて、それから  
庭で一しきりポチと遊ぶ。と、母がきつと「おさらひをおし」と  
いふ。おさらひは厭だけれども、これをしないと、すぐポチを  
棄てるといはれるのが辛いので、澁澁内へ入つて、形の如く  
本を取り出し、申譯に少しばかりおさらひをして、すぐに止  
める。あまり早いね」と母がいふのを、空耳潰して、つと外へ出  
て、「ポチ來い、ポチ來い」と呼びながら、近くの原へ一緒に遊び  
に行く。

二葉亭四迷

本名長谷川辰之助。愛知縣の人。文學者。明治四十二年五月歿す。(二五二二年一―二五六九年)

これが僕の日課で、ボチでなければ、夜も日も明けないのであつた。(二葉亭四迷「平凡」)

ペンギンが途中人間か犬かに出會つた時は大變である。假に人間が來たと見ると、ペンギン一同遠くで立ち止まる。先づ一行中の雄が一羽出て來て、恭しく首を下げる。やや伏目になつたままで、何やら長くと挨拶の詞がある。不幸にして人間には唯カカガアガアと聞えるばかりである。挨拶の臺詞が終つて後、初めて首を上げて、今度はすつと仰向いて、嘴で大きな輪を一つ畫いて、さてひよつと人の顔を見る。「お分りになりましたか」といふ風だ。元より以てお分りになるべき筈のものでない。人間はほかんとして立つたままだ。これが犬だとそれこそ騒だ。或時ペンギンどもが右の順序で犬に挨拶をしたが、元より犬に分らう筈はない。そこでペンギンが腹を立てて、三羽一時に例のカカガアガアをやり出した。犬は面喰つてワンワンと吠える。他のペンギンはきよんとして呆れて見てゐる。いやもう腹を抱へぬ者はなかつたといふ。(杉村楚人冠)

先月  
大正二年一月。

靈一靈

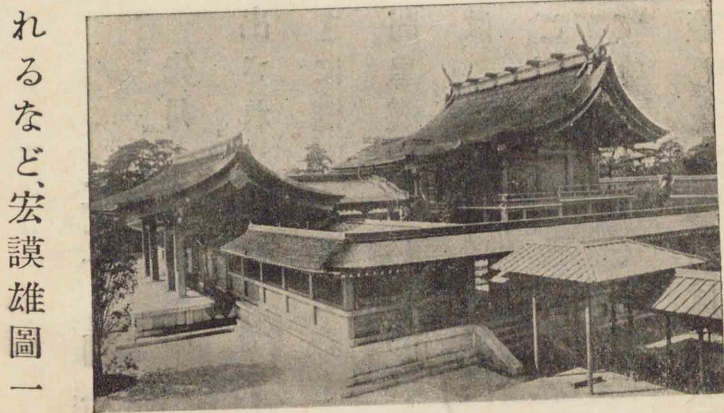
先帝  
明治天皇。

皇后陛下  
昭憲皇太后。

二五 明治天皇の御遺物を拜す その一

先月十七日、宮中から、地方長官一同に午餐を賜ふ旨仰せ出されましたので、例刻に參内致しましたところ、十一時すぎに權殿參拜を許されました。權殿と申すは、崩御の後一年間、皇靈を祭らせられる宮中の御室でございます。即ち私共は、この度先帝の皇靈を拜する特別の御恩典に預つたのでございます。そこで、私共は長く廣い御廊下に整列致しまして、宮中奥深く權殿に參つて、一人づつ最敬禮を致しました。蓋しその瞬間は、何人と雖も一種の靈感に打たれないものはなかつたのでございませう。その權殿と申すは、平素皇后陛下

下の謁見所たる桐の間を以てこれに充てさせられたので  
ございます。



それから更に奥殿に進みまして、  
明御學問所を拜觀致しました。御學問  
所は表御座所とも申し上げ、萬機の  
治政を御親裁遊ばされる處でござい  
神ます。先帝には長く此處に在らせら  
宮れて、徳教をお敷きになり、大憲をお  
定めになり、或は國交をお修め遊ば  
され、時に或は膺懲の師を起させら  
れるなど、宏謨雄圖一にこの中から發せられたのでござい

發一發

ます。然らばどんなに御立派な御部屋かと申すに、實に意外  
なことで、平常私どもが参内の節休息を許される御殿の方  
が、却つて遙に御立派であります。しかも、あまり廣くない二  
間續の御部屋であつて、瀟洒たる檜の白木造ではあります  
が、別段これと申す御裝飾も遊ばされてありません。御机、御  
椅子も實に御質素なもので、絨毯の如きは當初敷かれたま  
まのもの故、後には色も大分褪めて参りましたので、侍臣か  
ら御取換のことを屢願ひ出しましたが御許しがなくて、竟に  
今日に至つたものださうでございます。

御部屋は三方壁を以てめぐらし、南の一方に硝子戸があ  
り、御机は御座所の中央に南向に御据ゑになつてございま

まるる(参)  
つひに(竟)

据ゑ。

觀—観

す。この御構造を拜観すると同時に、夏分はさぞ御暑い事でいらつしやつたらうと感じましたが、先帝には御暑さの御厭ひもなく、連日此處に出御あらせられたさうでございませす。これにつけても、

年年に思ひやれども山水を

汲みて遊ばむ夏なかりけり

の御製を思ひ起して、誠に恐懼に堪へませんでした。のみならず、この御部屋にはストーブの御設がございますけれども、三十七年の冬以來御用ゐがないさうでございます。竊に承はるに、その年の冬の或朝、例の如くストーブに火を焚いてありましたが、先帝は出御遊ばすや否や、「火を消せ」と仰せ

Stove  
ストーブ

られましたので、侍従は何故か分りませんが、唯仰のままに火を消しました。さてその後と申すものは、如何なる酷寒と雖も、一切ストーブの御使用を御許し遊ばされなかつたとのこととございます。勿論大御心のほどを伺ひ奉るわけには参りませんが、侍従方の推測し奉る所によれば、當時皇軍が滿洲の野に大敵と戦ひ、飢寒に苦しんでゐるのに御同情を垂れさせられて、兵士と艱難を共にしようとの大御心に出でさせられた次第であらうと申すこととでございます。それ以來は、ただ一箇の小さい丸火鉢のみを御使用遊ばされたとの御事で、今その御火鉢を拜観するにつけても、思ひ出されるのは、斯民のうへを思ひやられた御製、

しづ(賤)

桐火桶かきなでながら思ふかな  
すきまおほかるしづが伏屋を  
でございます。

二六 明治天皇の御遺物を拜す その二

この御部屋の拜觀が終つて、更に別室の拜觀を許されま  
した。この御部屋には、先帝の御學問所において御使用にな  
つた御遺物全部が、そのままに据ゑ置かれてございます。こ  
れは今上陛下の大御心に出でさせられたやうに拜承致し  
ました。構造も、方向も、廣さも、御學問所と全く同一であつて、  
すべての御遺物も、昨年七月十三日、即ち先帝最後の出御當

今上陛下  
大正天皇。

Table  
テーブル

時の儘に御備附になつてございました。床の間には、その當  
時の御軸物が掛けてあり、その前方には御劔が數振横たは  
り、御机は中央に南面して置いてございました。先帝御在世  
の折は、我等如き者が、御机に接近することなどは思ひも寄  
らぬことでございますが、今回は特に御許しを蒙つて、仔細  
に拜觀する光榮を得ました。

まづ、御机は羅紗を鏡張にしたテーブルで、中程に焼痕が  
ございます。これは先帝が御煙草を召し上つていらつしや  
つた節、臣下より政務を言上致しました處、先帝には御吸ひ  
かけの御煙草をテーブルの上の或物に横たへて、御熱心に  
御聽取あらせられた折、煙草が墜ちてこの焼痕がつくやう

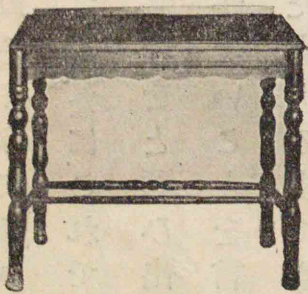
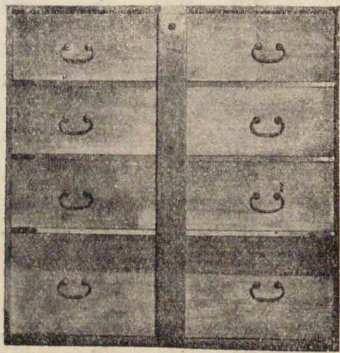
控へ。

になつたのだと申すこととでございます。さてこの焼けこげのあるテーブルの羅紗を御取り換へ申し上げようと、侍臣から幾度となく願ひ出ましたけれども、斷じて御許しがなかつたとのこととでございます。蓋し何物でもそれにて事足る以上は、修理さへ御控へ遊ばされる御儉徳の至と拜察し奉ります。

御硯箱は、明治二十年に、鹿兒島縣から御取寄になつた竹製の品でございます。そのなかの筆は普通の御品で、我等臣下の日常用ゐる物とかはらないのみならず、毛尖は禿び、軸の文字は見えないほどに御使ひふるしになり、墨も亦同様で、一寸位に磨りへらされた品でございます。鋏も亦同じ

く普通市場にある品で、その傍に、學校生徒等の用ゐる普通のインキがございました。最初は、侍従の方が何かの調べに用ゐたまま其處に置き忘れたのであらうと存じましたが、やはり先帝の日常御用ゐになつたものだと承はつて、今更ながら御儉徳の高きに感激し、自ら顧みて慙愧に堪へなかつた次第でございます。

御椅子の下に獅子の毛皮が敷かれてございます。これは青山御所にお出で遊ばされた頃から、久しく御使用に



明治天皇御遺物

Ball ボール  
White shirts ホワイトシャツ



物置の士兵

なつた物で、毛も次第に磨り切れ、皮も破れるやうになりましたので、臣下から御取換を願ひ出ましても、なに、これでよい」とて御許しがなかつたのを、せめて御修理をと願ひ出て、漸く御許しを得ましたが、然し適當の皮がないことを言上致しました處、何の皮でもよいとの思召であつたので、赤犬の皮で補足したと申すこととて、侍従が「この邊が犬の皮です」と説明して居られました。その傍に、ホワイトシャツを入れる白いボール箱やうのものが、澤山に積み重ねてございましたから、何に遊ばす物かと侍従に尋ねました處、やはりシャツの空箱であるが、書

類を入れるに便利であるとして、御手許に留め置かせられた物であるとの事でございました。

大臣方から上奏御裁可を願ふ書類は、紙袋に入れて、表に主務者の名を署して上るのださうですが、御親裁の後には、別の紙袋に入れて御下げになり、そして御不用になつた前の紙袋は、一枚たりとも御棄て遊ばさず、隨時御詠出の御製を御認めになる御詠草に御用ゐになりましたさうで、それを御側の方が別紙に拜寫して、御歌所に御廻し申したのだとこのこととございます。實に天下の物は、用ゐるにその途を以てすれば、一として無用の物はありません。先帝はかく萬機の政を聞き召されながら、一枚の反古をも棄てさせられず、

随—隨

御歌所  
宮内省の一局。  
御製に關する事務、臣民詠進歌の選擇、御歌會の儀式典禮等を掌る。



いらせらる

廢物を御利用遊ばされたのでございました。  
 又傳へ承はるに、先帝が皇室費豫算を御親裁遊ばされる節は、詳細に御覽になり、祖宗の祭祀及び慈善に關する費目の外は、務めて御節約に相成り、些かにても冗費をば御省き遊ばしたと申すことでございます。一天萬乘の大君におはしましなから、禿びた御筆を御用ゐになり、破れた敷皮を御下げにならぬといふのは、いかなる思召でいらせられませうか。皆これ節すべきを節して、有用の事にのみ御用ゐる遊ばさうといふ大御心に外ならぬことと存じます。  
 さて御次の間には、造花や、彫刻や、種種の物品が備へられてございました。これを拜見致しまするに、學校や展覽會等

儘一俵

よろづ

に行幸の節、御獎勵のため御持ち歸りになり、又は御買上にならせられたもので、御裝飾の御目的とは考へられませんが、それ故に、造花の如きも格別のものでなく、何年前のものか、色も褪めはてて、殆ど裝飾の用を爲さぬものまで、その儘になつてあるのでございます。その他、美術工藝品の如きも、皆御獎勵のため、俗人の道樂とは全く趣を異にしていらせられます。御製に、  
 千よろづの民と偕にも樂しむに  
 ますたのしみはあらじとぞ思ふ  
 とございますが、實にこのやうな御樂しみを求めさせられようとして、先帝には長い年月の間、大いなる御苦心を遊ば

されたのでございます。

今や我が國運は、先帝の長き御心づくしの御蔭を以て、隆  
隆として興り、我等は世界の一等國民となりました。顧みれ  
ば、我我は長い間、聖天子御一人に非常の御苦勞をお掛け申  
上げましたのでございます。ここに御遺物拜觀の光榮を  
拜謝するに當り、更に、

千萬の民の力をあつめなば

いかなる業も成らむとぞ思ふ

の御製をも同時に服膺して、公人としても私人としても、力  
のあらん限を集め盡し、以て「我が日の本のかため」のため、應  
分の貢獻をなし、御高恩の萬分の一に對へ奉らうと誓ふ次

對一對

第でございます。 (笠井信一)

昭憲皇太后御歌

北海道へみゆきましましけるころ

宮城野の萩のさかりを見ましてもみ苑の秋をおぼしいづらむ

北海道に渡らせ給ふを思ひやり奉りて

民のためいでますみちぞ北の海の霧もみ船をよきて立たなむ

おなじ頃栽菊といふことを

かへりますほごも近しと菊の花植ゑて待つこそ樂しかりけれ

春月

細ごのに立ちいでて見るわが影もうつらぬばかり霞む月かな

うれしきもの

たび衣かへりてみれば御子たちの車やごりにむかへましたる

湖上舟

玉くしげ箱根のうみをゆく船にうつれる富士の影うごくなり

笠井信一  
静岡縣の人。諸  
縣知事、北海道  
長官等に歴任  
す。昭和四年七  
月歿す。(二五二  
四―二五八九)

聖上陛下  
明治天皇。

### 二七 箱根神社祈願の記

明治四十五年の夏、われ箱根山下の湯本村にありて、聖上陛下御重病の飛報に接し、夢かとはかり打ち驚きぬ。この飛報は瞬くひまに、山又山を越え、海の外までも傳はりて、一團の愁雲忽ち東海の空を掩へり。六千萬同胞誰か憂懼に堪へん。村の在郷軍人會の人人、山上の箱根神社に詣でて、御平癒の祈禱をなすと聞き、われも請ひて、その一行に加はる。

午後五時、會長泉澤少尉の家を發す。會するもの五六人なりけるが、行く行く一人加はり、二人加はり、臺の茶屋に至れる頃は、二十餘人となりぬ。石を敷きつめたる舊街道を上る。

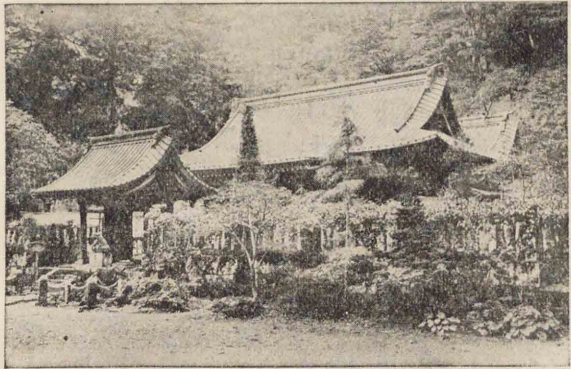
箱根神社

元箱根村にあり、瓊杵尊、彦火火出見尊、木花開耶姬尊を祀る。

よわき(弱)

普通二三十人も山路を上るとすれば、必ずや脚健かなるものは早く進み、脚弱きものは遙に後れて、ちりぢりばらばらになるべけれども、さすがに軍隊教育を受けし人達なるだけに歩調一致し、わざわざ號令せざれどもおのづから一團となり、急進者もなければ、落伍者も無し。須雲川村に至れば、來り加はるもの一人あり。村民各戸前に立ち出で、一行に向つて、「御苦勞様」と挨拶す。畑宿はたじゆくに至れば、二三人加はる。こども一行に挨拶すること、須雲川の如し。老平に至り、甘酒茶屋に休息するほどに、日全く暮れたり。思ひがけずも、杜宇一聲聞ゆ。聲せし方を仰げば、二子の峯、暮色の中に淡く見えて、高く天を衝く。

湖水  
蘆の湖。



箱根神社

權現阪を下りて元箱根に至り、一同湖水に手を洗ひ、面を洗ひ、口を漱ぎて、身を清む。うれしや、湖上ばつと明かになりて、半輪の月雲間にあらはる。離宮のある塔が島、四山の中に最も黒く見ゆ。恰も巨人の臥すがごとし。湖水は眠りて、ざぶとの音だにもなし。嗚呼この月は我等の祈願の光明ぞとばかりに感ぜられ、遙に離宮の空に向つて伏し拜む。この離宮建ちてより數十年、鸞駕一たびも到らず、日夜國の爲に盡瘁せられて、避暑、遊覽の御暇だにあらせられ

ざりし一事にても、聖徳の一斑を仰ぐべし。而してこれこの度の御病の一因となりたるにあらずやと思はるるにつけても、日本の臣民誰か感涙に咽ばざらんや。

提燈の光をたよりて、老杉の中の石段を上る。夜氣肅森として、神聖の地殊に一層神聖なるを覺ゆ。石段を上りつくし、唐門の外に立ち神官の來るを待つ。あたりは物暗けれども、杉の木立の隙間より、仰いで月魄を見る。さきに湖畔にて見しより一層さやかなるに、いよいよ祈願は成就するなりと、心何となく



蘆の湖の逆富士

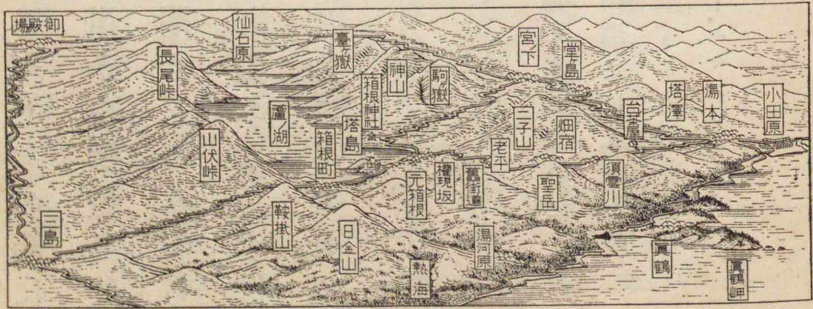
祓ひ  
ひざまづく

躍る。石段の下より提燈の光見え初め、暫くして、からんからんと下駄の音、聞え初め、又暫くして、始めて登り果てたり。これ神官なり。一同神官に導かれて拜殿に上り、ここにて神官に祓ひ清められて、内陣深く進み入り、神官の後にひざまづく。蠟燭の光かすかにして、壇上の様よくは見えず。唯神官の右に、偉大なる太鼓ありと見る程もなく、どんと一聲天地の寂寞を破り、大祓の祝詞を讀む聲これに和して起る。鼓聲急にして祝詞の聲も急なり。さびたる聲にて力あり、人をして自ら肅然たらしむ。次に一同の姓名を讀み上げて御平癒祈願の詞を陳ぶ。意至り情盡して、有り難しとも有り難し。一同拍手頓首し、一一神酒を頂戴して退く。

隠  
隠

湖畔に來りて、天を仰げば、嚮の明月は早や雲に隠れて、天地全く暗黒なり。心もとなく思はれて胸に動悸の波打ちしは、我のみにもあらざりけり。一旅店に就いて各辨當を食ひ、休息する間にも、心は一つ、他の雑談なし。

これより三箇の松明を燃して、夜の箱根山を下る。天地暗黒の裏、唯この前後數十間の間のみ赤し。石ごろごろの嶮阪を下つて、畑宿に來れば、人人は村はづれに焚火して一行を迎へ、一休憩店に導き、一行の勞を謝



大町桂月  
名は芳衛。高知縣の人。文章家。大正十四年五月歿す。(二五二九年—二五八五年)

し、茶と力餅とを饗し、いづれ御禮參の期あるべし。その節には、大いに祝宴を開かんといふ。殊勝なる心掛かな。御禮參は畑宿の人の期せしのみならず、我等一行の期せしのみならず、日本國民上下一般の期せし所なり。期せしのみならず、信ぜし所なり。然れども、千秋萬古、御禮參するに由なくなりぬ。嗚呼悲しいかな。(天町桂月—桂月隨筆集)

日本が今日のやうに偉大なる強國として將來を有するに至つたその成功の大部分は、實に明治天皇の先見と決意と指導とによるもので、世界史上未だ曾て陛下治下の日本の偉業と比肩するものを見ない。陛下は世界英雄中の大英雄である。(ロンドン、デー、エキプレス)

アルプス  
歐洲中最大なる山系。西北はフランス、ドイツ、スイスと、南はイタリヤとの境を劃す。

### 二八 角笛の響 その一



雁孤江吉

フランスのアルプスの山へ行きますと、夕方など、霧のかかつて来る草原や杉の森の中から、角笛の響が遠く近く聞えて來ます。谿を隔てて向の山から、その響が林や丘や谷間に研して、悲しく物寂しく小暗くなつた野路の上へ、微かにたゆたひます。

何の爲の角笛でせうか。これは一日中草原へ放しておいた羊の群を呼び集める爲に、牧童が吹く笛の音です。羊は長い草の中や、夏草の咲きみちた森蔭を、一日中自由に遊びま

はつて、思はず遠くまで迷つて行く中に日が暮れます。そこで番をしてゐる羊飼の子供は、まづ犬をやつてそれを集めます。羊飼の犬ぐらゐ賢いものはありません。皆さんは澤山の羊の群が、一匹か二匹の犬に守られて通つて行くのを見た事がありですか。幾十幾百とない白い羊の群は、草原から、森の中から、八方から、犬に教へられて、むくむくと雲の涌くやうに一つの處へ集まつて來ます。犬は鳴きながら四方八方をかけ廻つて、草の中へ、森の中へ、谿の中へ飛び込んで、一匹残らず、遅れて道を失つた羊を探し出します。その集まつて來た羊のまはりを、犬は前へ、後へ、左右へ驅けまはつて、遅れたものを叱りつけ、弱つたものをいたはり勵ますやう

遅—遅

いたはり

にして、次第に羊小舎の方へ連れて來ます。

それでもまだ見落されて迷つてゐる羊が、草の中に居るかも知れませんが、羊飼は角笛を吹き立てます。その響が四方の林や谿に響き渡ると、どんな處に迷つてゐる羊でも、必ずその響をたよりに集まつて來ます。中には頸に鈴を付けた羊がゐます。その鈴の響が、夕闇の、草の葉の茂つてゐる中でするのは、いかに寂しく、また懐かしいものです。

この角笛の響には、フランスの舊い物語が籠つてゐます。今日アルプスの山中で、この羊飼の笛の音を、夏の夕方耳にした人ならば、必ずその物語を思ひ出すでせう。

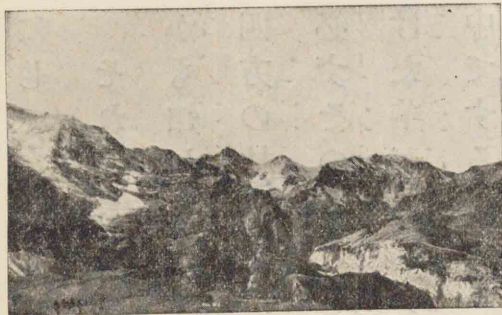
昔昔、今から千百年以上の昔のことです。今のフランスと

必ず。

Charles the Great  
 チャールス大帝  
 佛國王ビンの  
 の子。大いに  
 版圖を擴張  
 し、西羅馬帝  
 國を再興して  
 帝位に即く。  
 (西曆七六八  
 年—八一四  
 年)

Pyrenees  
 ピレネー  
 フランスとス  
 ペインとの國  
 境を劃する山  
 脈。山中に温  
 泉多し。

くはだつ(企)



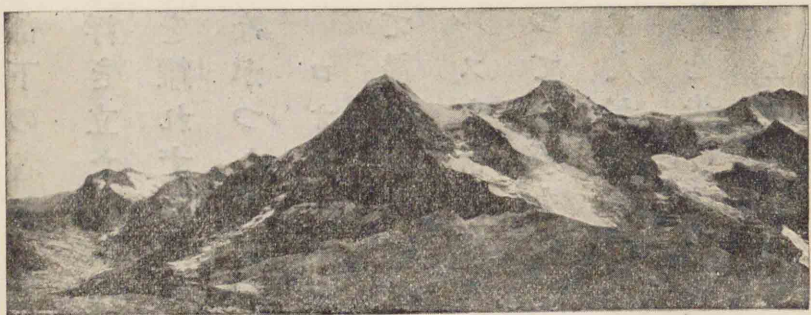
ア  
ル  
ア

ドイツと兩國に跨つてその領土を占めてゐた、チャールス大帝といふえらい王様がりました。その當時の歐羅巴は、一時全くこの王様の支配の下に置かれた位の勢でした。ところが、その頃今のスペインへはアラビヤ人が地中海から侵入して、非常な勢でその土地を征服して、チャールス大帝へ對しても、いつも謀叛を企ててゐました。チャールス大帝はそれを怒つて、軍隊を引き連れて、ピレネー山といふ高い山を越えてスペインの地へうち入り、アラビヤ人等を征服してしまひました。

しづしづ

あぢ(味)

しづ(沈)



ス  
連  
峰

さてチャールス大帝は隊伍を整へて、しづしづとピレネー山を越えて、フランスの空の方へ向つて歸つて來ました。幾月もの戦のために、人人は早く故郷の空を仰ぎたく思ひ、故郷の山河を望みたく思ひ、そしてその美しいフランスの土地から産する紫の葡萄の味を思つて、胸を躍らせながら勇んで山を登つて來ました。

けれどその時、チャールス大帝一人だけは何となく沈んだやうな顔色をして、



ロオラン  
Roland

おさへ

部下の者どもがはしやいであるにも關らず、黙つてとかく浮き立たない様子をしてゐました。それはいつも自分の傍を離れずにあつた、自分の甥のロオランといふ英雄が傍にゐなかつた爲でした。

ロオランはその時軍隊の殿となつて、敵のおさへとつて最後から來るのでした。といふのは、アラビヤ人はチャールス大帝に降服の約束を結んだけれど、いつその約束を破つて謀叛を起さないとも限らないからでした。若しアラビヤ人が叛いて、背後からロオランに襲ひ懸つたならば、その急を告げる爲に、最後の手段として角笛を吹くことになつてをり、それを合圖にチャールス大帝の軍はすぐ引き返し

をり(居)

てロオランを助けることに決めてあつたのです。

## 二九 角笛の響 その二

もう大帝の部下は喜に小踊して山路を登りつめ、そろそろくんだり阪の方へ向つてゐました。フランスの空が彼等の眼の前に輝き出し、美しいフランスの平野が彼等の脚の下に廣がりました。彼等は跳り上つて萬歳を叫びました。けれども大帝一人はやはり黙つて、沈んだ顔付をしてゐました。そして今彼の部下が叫んだ萬歳の聲がまだ消えてしまはないうちに、大帝は馬をとどめてちつと耳を澄し、部下を顧みて、今角笛が響いたではないか。ロオランの角笛が」といひ

ました。

部下の者にはただ谿を走る水の音と、林の中の風の響しか聞えませんが、皆の者は大帝に「あれは風か水の音でせう」といひました。軍隊はまた悦び騒いで、大帝を包んで下り阪をおり初めました。けれどチャールス大帝は、ロオランのことが何分にも氣に懸つてなりません。只一人黙黙として馬を前めてゐました。

すると今度は、確にはつきりと「ぼおう、ぼおう」といふ角笛の音が、人馬の騒の下に聞えて來ました。チャールス大帝は「そら」といつて馬の頭を立て直しました。今度こそは明かに皆の者の耳にも聞えました。部下の者も一時に足を返して、

斷—斷

今來た路へ急ぎました。角笛の響は斷續して聞えて來ます。

勢—勢

ロオランはどうしたでせうか。彼は四五人の従者と共に、軍隊の最後からしづしづと山路へ懸つて來たのでした。するとチャールス大帝が心配してゐたとほり、それまで従順な風をしてゐたアラビヤ人等は、俄に大聲で叫び出し、大勢の人間が一時に武器を執つて、ロオランの背後からどつと襲ひ懸りました。彼等が恐れてゐたのは、この英雄ロオランとその部下とでした。今そのロオランが、小人數で軍の最後から山路へ懸るのを見ると、この人人を討ち取つてしまひさへすれば、チャールス大帝の大軍とても恐るるに足らないと思つたのでせう。いちやくロオランの身邊に迫つて、

しまひ。

八方から兵器で圍んで襲つて來るのでした。そして口口に、「ロオランよ、自分等の軍へ降れ。でなければお前の命はないぞ。チャールスの軍は、もはやお前を置いて遠く行つてしまつた」と叫ぶのでした。

ロオランはその中に突つ立つて八方を睨みつけ、「汚はしい。何で汝等に降參するものか。我が劔一度鞘を脱すれば、汝等の頭は秋の木の葉のやうに拂ひ落されるぞ」と大聲に叫び立てました。その勢でアラビヤ人は一時四方へ退きましたが、また多勢を頼んで集まつて來ます。従者は約束の角笛を吹き立てようとしましたが、ロオランはそれをとどめて吹かせません。そして彼の大切にしてみた名劔を抜き放つ

いきほひ

て、獅子王のやうに荒れ狂ひました。

けれど、何分にも數知れぬ攻手の爲に、さすがのロオランも次第次第に疲れて來、部下の者も或は傷き或は死にました。もう如何とも仕方がないので、彼は自分で角笛を取りあげて、呼吸のかぎり死物狂に吹き立てました。角笛の吹口は、ロオランの口から出る血で赤く染りました。その響は山に谿に、恐しい大牛の最後の叫のやうに、研して鳴り渡りました。

それを見ると、アラビヤ人等は一齊に聲をあげて、八方からロオランを取りまいて肉薄して來ました。ロオランももはや自分の最後が來たと覺悟をきめました。それにして

きすつく(傷)

いは(岩)

たふる(倒)

閉ぢて

も、自分が今まで幾十回幾百回と戦つて勝つて來た、その大切な名劔を蠻人の手に渡したくない。むしろ岩を切つて劔を折つてしまはうと、傍の大岩にはつしとばかり切り付けました。劔の先から火花がばつと散りました。その時ロオランは、今まで自分が戦つて來た幾つかの勝利の姿が、まざまざとその火花の中に浮び上るのを見ました。彼は遂に大木の陰に倒れました。

アラビヤ人は一度にロオラン目懸けて驅け寄りました。その時です。ロオランの閉ぢて行く目の前へ、チャールス大帝を先頭に、六萬の大軍は逆落しに山を驅け下りて、関の聲をあげながらアラビヤ人の中へ殺到しました。

角笛の響の中には、今でも尙この英雄ロオランの最後の恨が籠つてゐます。

夏の夕方アルプスの山中で、一度でもこの角笛の音を耳にした人は、この悲しげな物寂しげな、そして舊い舊い昔物語を籠めた不思議な響を思ひ出さずにはゐられないでせう。(吉江孤雁—角笛の響による)

吉江孤雁  
名は喬松。長野縣の人。早稻田大學教授。明治十三年九月生まる。

徳川光圀が七歳の時であつた。父の頼房が光圀に向つて

「私が戦場で大傷をうけたら、お前は扶けて立ち退いてくれるか、どうする。」

と聞くと、光圀は言下に、

「その節には、私は父上の體を越えて、進んで敵を斬ります。」

と答へたから、頼房はこの奇答に感じた。(高島平三郎)







國語假名遣一覽

Table with columns for kana characters (あ, い, う, え, お, か, き, く, け, こ, け, こ, け, こ) and rows of examples and definitions.

昭和四年十月五日 印刷  
昭和四年十月八日 發行  
昭和五年十月四日 訂正發行



發行所

東京市神田區錦町一丁目  
振替口座東京四九九一番

印刷者

發行者

編者

株式會社 明治書院  
電話神田(25) 二一四七番(3)

東京市神田區三崎町三丁目十二番地  
細谷祐三

株式會社 明治書院  
取締役社長 三樹退三

東京市神田區錦町一丁目十番地

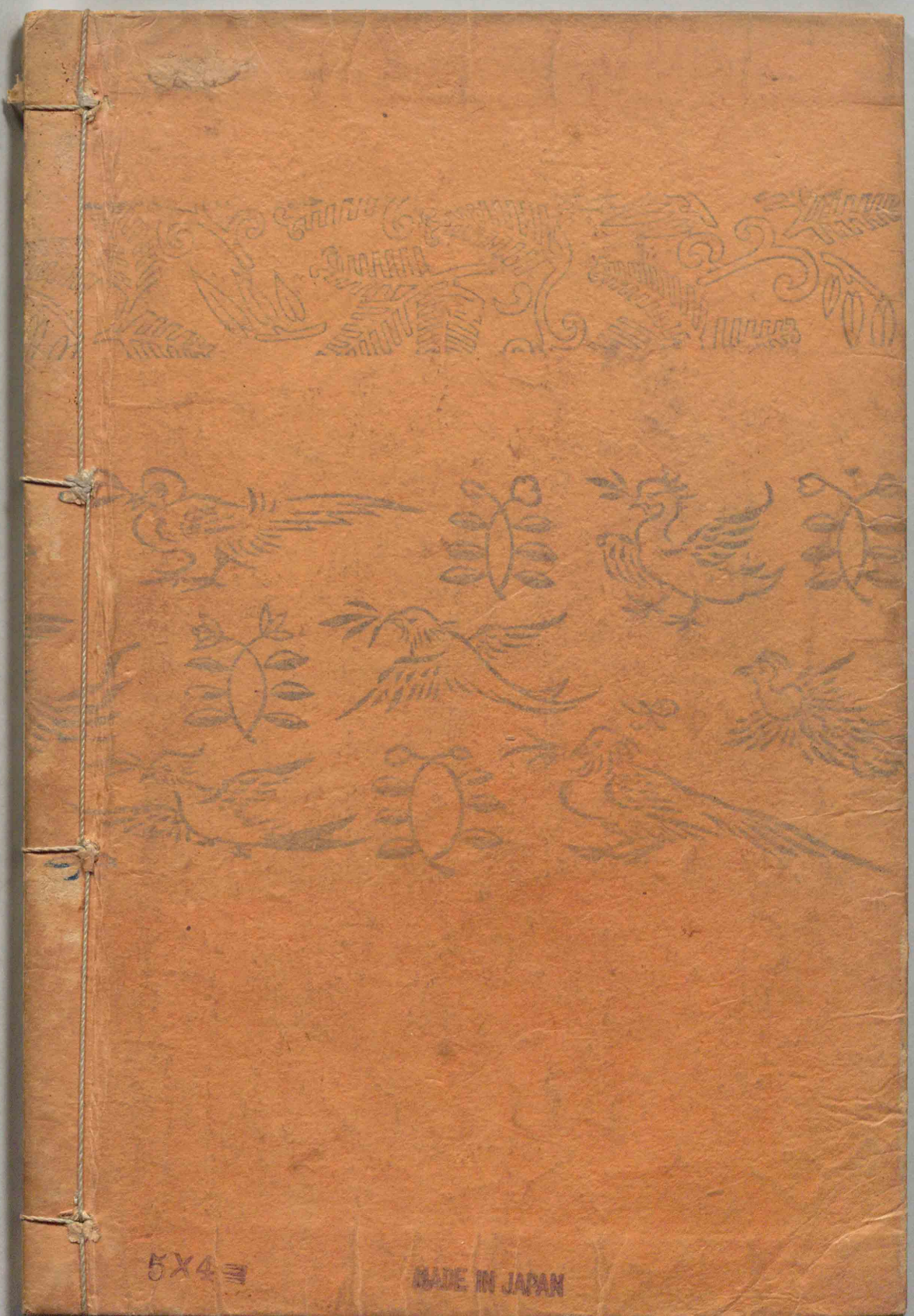
落合直文  
金子元臣

Price table for different volumes.

定價	
自卷一 至卷四	各金六拾四錢
自卷五、六 至卷七	各金六拾錢
自卷八 至卷十	各金六拾壹錢

中等國語讀本(新修二版)





5x4

MADE IN JAPAN